主幹・麻生路郎

川柳雜誌

六月號

大正十三年二月二日第三種郵便物認可
昭和五年六月一日續行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

第七卷 第六號

川柳雜誌社發行

六月例會

▼日時　六月六日(金曜)午後七時
▼場所　南區清水町電停西入北側　端の坊
▼兼題「果物」三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第七卷第六號目次

感想・研究・其他

大柳雨翁の半面　蛭子省二
主觀句の研究　福田山雨樓
旅より　諸家
竹馬居雜筆　蛭子省二
月卓を圍んで評　路郎紋太　山雨樓ひろし　琴人乱耽
柳雨翁逝く　麻生路郎

句の獨創力　安川久流美
四錢で道後行　三好革郎
くわうふう的な湯氣　若井たけし
モルフィネ挿話　平井蒼太
初夏　森石竹
戀愛風景八題　伊藤綠之助
感想　尾崎海洋人
はんしよごま　辰巳籬楓
思ひ出　熊本黃蛾
句會に就て　丸山公二

一路集(募集句)

耳　森東魚選
手　中野柳陽選
柱　伊藤綠之助　安西杏三　共選
六厘坊忌　上田柳影記

BUILDING

各地柳壇　橋本綠雨
杭全町MEMO　雨町生
編輯後記　吉田きよし
表紙題字　小出檜重

創作

近作　麻生路郎
川柳塔　福田山雨樓
出口雨町　住田亂耽
伊藤綠之助　伊藤愚陀
松盛琴人　岩本素人
中島鐵洲　水谷鮎美
朝田新水　松丘町二
橋本綠雨　太田朝陽

◇

丸山公二　中見光路
中澤濁水　熊本黃蛾
生田翠夢　若井たけし
櫻井圓角　森石竹
阿部閑生　西村市公
須崎豆秋　植田湖舟
松村敏郎　桑原京郎
楊井二南

粒々集

長崎柳秀　前田五健
大島濤明　諸家

近作柳樽

近作

麻生路郎

夫婦爆笑愛は無限の線となり

枕蚊帳河鹿ではござんせぬわたしの子

ちんぽこを出す子よママちやんお留守なの

悪運つきず資本家の端

おべつかが米の飯とは知らざりし

暴力はよしキリストも殺される

近作柳樽

路郎選

妻も早やライスカレーの味に慣れ　神戸　艶笑
湯ざめせぬ間に寢る癖の指の皺　同　同
靴を脱ぐ庭へ夕刊落ちて濡れ　同　同
君は紅を我れは黄を吸ふソーダ水　同　同
ほたん刷毛まだその上を塗るつもり　松山　武子
高島田結ひ上げられて午が過ぎ　同　同
花散つてぼんぼり丈の灯がまばら　同　同
修身で習つた事を母に告げ　同　同
借りた金ながら今夜の氣が強い　神戸　可村
蔭ながら見送る人の脊が低く　同　同
他人てふ言葉淋しく聞かされる　同　同
忘れ物も一度禮をして歸り　同　同
まだはやい早いと別れ惜しう呑み　大阪　壽枝女
春宵の身輕さにちよと出てもみん　同　同
ゐんごうの花藥すべにもつれ咲き　同　同

秋篠寺にて

雷の臍とやおもしろやいぶかしや　同　同

友とわかれてくる雨のつめたさ　神戸　鎌月
湯沸かしのにぶうに光るのもうれし　同　同
兄のあかるさにまけて戻りぬ　同　同
掌へ白髪氣兼もなく抜かれ　東京　山門
みんな揃つて夜の膳動く　同

塚越迷亭氏へ

一と通り理論は立てゝ甲高し　同　同
冷めたうに冷めたうに女事務の戀　大阪　凡々子
尊とからずや遊女人間　同　同
感情の凝固が悲し密柑むく　同　同
軒先に濡手拭の搖れる朝　道後　計加
山池にゐもりポカンと浮んでる　同　同
もう出たか出たかと山の曲り道　同　同
見殺しにする氣はないが金はなし　大阪　翠峯
春風に心せかるゝ許嫁　同　同
暫くは親に卷かれてゐる二人　同　同
看護婦の冷えた手先に眼をひらき　堺　清路
春の宵線香馬鹿げていゝ匂ひ　同　同
泣いてゐる顔へぬらく糠袋　同　同
正直とゝふも御主人本位なり　鳥取　聽松
泊り客送つて女房がつかりし　同　同
通信簿さて〳〵不甲斐ない子かな　同　同
土産貰ひし子がつまづけり　金澤　旭虹

三月の堤防に寢て唄ひたり　同
悲なくミルクの罐が空になり　同
春の灯を吹ふて溶けたり角砂糖　大阪　浪街
チユリップ戀の手紙を書く机　同
反抗も持たず五人の子を育て　同
花からの歸りへ世辭のいゝ巡査　神戸　志郎
人目ひくマントで濱にもの思ひ　同
小說家になれミ無心へ返事が來　同

解雇された日煙突高し　加古川　光穗
煙突のもうかつてゐる煙を出し　同
覇氣もなく模範工手のそれでよし　大阪　狂司
君戀しなゞゝ女給のバーは暇　同
けだものゝ愛にも足らずして夫婦　大和　勝二
馬もそして仔馬も霧へ霧へ逃げ　同
嫁かぬ氣は笑つてばかり居て二十　武庫川　四方路
錢湯の眞晝へ一人忘れられ　同
他家の子には實に光陰矢の如し　大阪　苦笑
俺は今何考へてゐた机　同
言ひ返す虫を押へたお念佛　松山　文芳
行末の事一笑に附する醉　同
借家なる事も忘れて住馴れる　大阪　紫電改　双車
金權を笑ろたが淋し懷手　同
混血兒にはこべを摘んで親しまれ　神戸　卯生

愛人は悲しよめ菜の香がのこり　同
落馬〳〵と蒲團へ子を落し　大阪
はだかけん今日は負けたい衣裳なり　同　十戒
店番に符牒の落ちた品があり　姫島
理に勝てど嫂他人てふひがみ　同　二竹
遠慮してゐる間に戀を横ぎられ　大阪
母の手でやつと學士になつて死に　同　大黄
緊縮を緊縮をして風邪をひき　同
この親切戀でないのだとは淋し　伊豫
世の中へ歩む姿勢がくづれてき　同　春市
目出度き日かはる〴〵にめしを食ひ　大阪
肺病に男は毒よ菜種咲く　同　観月
俺が死んで悲しむ光景を想ふ日よ　島根
春の日へものうきことぞ髪がのび　同　龍村
洒洒と死ぬるきはまでにぎやかし　姫島
三十三まだ〳〵柄の帶がいる　同　方眠
巧言も令色もたゞ食ふ手段　同　尼崎
この虫にかゝづらはつてゐるも春　同　白虛
掌にあまる涅槃だんごのうれしくて　金澤
病床へすげなく來たる離縁狀　同　木偶人
とまつてゐる蠅は追はれる元氣なし　蛍ヶ池
ちと忘け者にされてる二食主義　同　二三夫
聲少し高め言ひ負けまいとする　長野
同　柳兒

花情改

貧乏は病氣するより少し増し　愛媛　空山

文明よ機械よ俺は食ひはづし　同　同

くゞらせる氣で裏長屋干してゐる　神戸　一鴉

道のないこゝを近道踏んでゐる　同　同

そんなにすましちや鼻が困るぜ　金澤　好次

薄闇の姿へかるくふりかへり　同　同

花咲けど娘笑へど神經衰弱　別府　晃卓

行末は兎も角草の芽が伸びる　同　同

死んだよな町なり醫者はよく寢入り　松山　雨眠

猫の死を言ふに妾の仰山さ　同　同

出戻りは鋏へ少し音を立て　大阪　武藏坊

久々で會ふ母親の顔を立て　同　同

いゝくらし親子が風邪をひいてゐる　神戸　九葉

長く着たシャツを女房にわらはれる　同　同

つまらないのならなぜ死なないんです　別府　綠汀

處女といふ誇りも淋し二十七　同　同

憧れの金に一生疲れ果て　石川　吉祥

心配もします天地に子が一人　同　同

何をまあ女房をベルで呼んで居る　大阪　裸人

貰ひ兒へしりこそばゆい父と母　同　同

あり合せなぞゝ斷る膳を出し　朝鮮　如空

煙草店小錢を貯めたのが初め　同　同

人妻だ返事待つとは愚なり　島根　紫光

あの手紙かまごの炭になつただろ　同　大阪　山茶花
チヤアルストンうまく踊れてコツク也　同　同
うらゝかな戀にオールがさゝやくよ　同　鳥取　耕民
休憩の待てぬ女工の乳の張り　同　同
素直さは皮肉る方が物たらず　同　大阪　蒼太
童心の朗らかにものを云はんかな　同　同
石ころを積んでは崩す思ひごと　同　同
人間が出來てゐるこや腰低し　同　神戸　不然
書出しに御立替金五十圓　同　同
櫻んぼゆすりに行けば鳩がにげ　同　大阪　成馬
稽古着で來たのが風呂をぬるうする　同　同
聲援をされて踊子よくをごり　同　京城　瓢二樓
手垢まだつかずメートル尺こわし　同　同
靴音を校長さまと知る時刻　同　大阪　大夢子
出養生の眼に麥の芽の伸びること　同　同
雨止んだ綠の庭へ下駄を借り　同　東京　歸一
一家を立てん菜葉服なり　同　同
春の宵板の間ぢかに踏む心地　同　島根　巨柿
桃らんまんからたち牆に圍まれて　同　同
蜘蛛落ちて春の流を騷がせる　同　大阪　一舟
低空飛行頭擦られたかと思ひ　同　同
手土産を野菜に替へて戻つて來　同　明石　了念
ウインドへ春着をほめて立つただけ　同　同

美望をされて淋しい一人旅　大阪　北人
かけがいのない汽車辨の箸が折れ　同　同
遠慮して席をゆずれば茶をこぼし　京都　呑空子
遺言はどうであらうと多數決　同　同
跪く龜踊るなんぞと馬鹿にされ　大阪　鯉友
大臣を一人前の男と見　同　同
二本しかない足今日も疲れ切り　吳　光哉
三十五の男に吳れる月給か　同　同
名刺よりバットの箱に注意され　大阪　規堂
此れまでがなかく〳〵でした松の苦　同　同
美髪院氣取つた足でドアを出る　河内　赤笑
ニコポンを使ひそこねた賴りなさ　同　同
もう耳が耳がと父の病み呆け　大阪　清
新綠に我が家の軒の低う見へ　鳥取　青水
嫁の欠伸に姑の留守がしれ　神戸　淡煙
雲もなく今日の休を奈良ときめ　大阪　敏雄
妹の戀か口笛門に聞く　大阪　憲太
生活苦貞操論を嘲笑ふ　京都　麗笑子
天理教内助する氣の妻の歸依　釜山　骸花
今出來たすしへかけんの手が伸びる　大阪　山抱子
戀人を後へ廻す喧嘩にて　長野　蛙皷
まだほんのお前は子供スイトピイ　大阪　素心
急ぐ程紐の縺れる下足番　大阪　菊路
云ひすぎてすご〳〵歸る雨の中　鳥取　樂之雨
不勉强病氣ばかりの責でなし　大阪　定胤

引越した此處もうるさい目で見られ　鳥取　湖山
失業者花が咲ぬがよいのなり　大阪　樹光
眞實の戀まゝならぬウエトレス　吳　英雄
馬鹿になれ馬鹿になれとで慰むる　大阪　大觀
魔窟へも櫻々の灯がともり　同　沒食子
俺は戀をしてはるけない貧棒なのだ　京都　與志雄
久しぶりやつぱり友の背が高く　大阪　正三
正確な時計で來れば來て居らず　同　繁
正直に云ふてるるのへ癇がたち　京都　吐露
繪封筒へむごく刺されしペン先や　大阪　沐天
先生の和服病氣ときまつてる　奈良　青柿
石段を見上げて草履買ふ氣なり　大阪　英郎
女房の親ゝゆつくり醉つてるる　神戸　四三二
釣錢を出す間女給の眼が光り　大阪　みつる
菜の花も見えず工場のすゝけてる　愛知　青笛
食ふ爲の意識が口へ働いて　大阪　八歩
刑事もう强請れる程に磨かれて　東京　九城
鼻をふく癖をこの子の袖に見る　龍山　勝人
手の足らぬ仕事へ傷の長引いて　大阪　四五磨
鯛らしう見せて煮賣屋よくはやり　堺　太路
貧しい中から幼年の友買うてやり　大阪　龍北
要領を得そうなとこで三通話　堺　幻草
新町で騷いでそれが交際費　蛍ヶ池　武郎

働いたお金にしては少なすぎ　大阪　玲峯
ある時は眞面目に盡してくれた愛　京都　無冠王
父に笑はれ母に泣きつく　大阪　正博
金貸は汚ない判だなと吐し　京都　黄子朗
ゴム底に春の歩道の砂ほこり　奉天　登美坊
丸き石の太りたる子に似たるかな　大阪　海洋人
戀をして女中羽織がほしくなり　螢ヶ池　正坊
ごこまでも恩に被せられ首になり　大阪　志洋
明日を案じる夜具の重さよ　大阪　露斗
ぐらついた椅子教會の隅に居る　大阪　曉風
何をしようが同じ人間　岸和田　幸泉
ふざけては居れどピエロは汗をかき　大阪　麥角
背水の陣際物を仕入れ過ぎ　大阪　秋壷
型にはまつたサラリーマンに子がふゑる　島根　專路
苦しんだだけが樂しい戀でした　大阪　朝雨
看護婦の胸のまろみに目をつぶり　螢ヶ池　松露
人生を歩み疲れたこの姿　大阪　柳翠

送別の感

母だけは驛へ送つて來てくれず　堺　金太樓

神魔經改

看護婦の髪が戯れそうになる　大阪　洋太
死にたいと思ふに人は親切なる　愛知　枯骨
今日も亦倉庫の音を横で聞き　大阪　英賀夫
仕事場の前は花見の人が込み　鳥取　源太夫

一軒を借りて

煮豆屋へ再々用のある世帶　大阪　村樂
心あかさずカクテルをなめ　同　笑四

許すも許さぬもない左様なら　金澤　今雨
爭へば淋しきものは母の目か　石川　亂雨
齒科醫には見せられぬ齒でよく稼ぎ　大阪　與詩夫
チヤルメラの音に童心よみがへり　畝傍　籬楓
經木書きあえぎ疲れた青い顏　大阪　憲坊
不平の口に酒の栓する　鳥取　佳水
着物のにほひ死んだこは思へない　大阪　卜居
春の汽車一升壜でつぎ廻り　大阪　碧水
鼻をふくらませてシテの聲になり　岡山　笑人
好きな鋤燒母落第を知らぬなり　大阪　莢一
灯がついてからも用事が殘つてゐ　龍田　初女
襤褸でも慾しい時が來ようぞ罰當り　大阪　明佳
乞食は二人を知らぬ樣に喰ひ　名古屋　草石
つぎあてた服も辛かろバスガール　大阪　無鬼
提灯へおくれがちなる高島田　松山　夢鄕
緊縮をうちの親父は楯にこり　大阪　惠宣
朝の飯一つを固く嚙んで呑み　臺南　冬木立
不景氣になる樣になれこ手をつかね　大阪　燦郎
自轉車が廻轉燒へまで走り　同　野人
笑ふても貯められるだけ貯める慾　大阪　一騎
子を持つて子のない兄へ意見する　同　喜天
菓子やつた娘に髷で挨拶されてゐる　兵庫　白水
抱き上げてやれば帽子を子がかむり　大阪　苔香瓏
青梅の塀から外の子を叱り　同　桂枝
奥さんこ居ればうるさい人の口　福岡　不忘
同じここ見つめて今日も病んでゐる　大阪　黑天子

大柳雨翁の半面

——古句分類の第一者——

蛭子省二

私の父さも言ふべき西原柳雨翁＝そは二つの意味に於て、即ち一に川柳詩上の指導、二に年齢上からの愛情を垂れられた翁が、突如此の世を去り玉ひし訃報に接し、哀愁極まつて泣くに涙なき次第である、麻生氏の『柳壇の人々』の最初の筆になつた私は、無論友人としての君が交誼上過分な引立てをされた事で、自ら當らないのはよく知つて居るが、アノ一文を翁が讀むで下さつたなら、父らしい微笑をもらして呉れた事と察知し、今更乍ら残念に思ふ。

翁が久留米や山口に在つて、更に川柳家と交際せず、又殊更に川柳家の著述を求められず全く獨力で類推研究法の下に、根本的に古川柳の一大分類に着手された頃＝明治四十三年一月から、十世川柳其他の人々へ差出された・質問錄二十一冊積むで一尺一寸の半紙四千枚の研究記錄は、現に私の手元に保存され其苦心のいかなる程度のものであつたかを、明かに物語る材料である、當時最早あらゆる柳書に眼を通され、柳多留は實に百五十七編迄の難句拔萃が行はれてゐたのである、たとへば本誌

投句家の多くは、明治四十三年などと云へば、恐らくは川柳に無關係か、或は古句などは省みられなかつたであらう。

「私の質問錄にて御覽の通り、あの時代の川柳に對する私の研鑽は實に幼稚なものにて愧しき次第に候、あの時は私が四十二三と假定して、貴殿今日の御造詣の深き事はとても比較にならず、此勢を以て貴殿四十二三の時には、恐らく斯界のオーソリティーなることは、歴然たるもの是非〳〵御奮勵切望の至に御座候」

（大正十四年九月十二日附端書）

なごと、常に私を古句研究道に倦ましめぬ樣手引きされたのだ地方に在つてごうして夥多な柳書原本に眼をさらされたかは、彼の有名な東京の藏書家寶井平藏氏の力が與つて居る、氏は奇特家で金錢を惜まず蒐集した古柳書及關係珍籍は、後年悉く東京帝大圖書館に寄附されたそうだが　大震火災で烏有に歸し去つたのは惜しみても餘りある、私の同窓の大先輩であつたけれど遂に面晤の幸を得る機なく、先年長逝された。十世平井川柳も亦亡き人であるが、藤田寶船逝（雜俳宗匠）、高宮彌學氏（漢文の先生）、方々難句に對し倶に意見を記入され、質問錄の肩書に『文珠の智惠』と添えられてあるのは、それら三氏を指したものである、今日の古句知識で檢すると、十世の說には多分の謬見があるけ共、其熱心と親切に至つては、私は曾て相遇した事のない程感されてある、隱れたる柳壇の努力だと敬服の外なく、私が書齋で質問錄と列むで撮影したものを、十世翁に贈り爾來私は寒暑の御挨拶狀を差出し、其德望を忘れなかつた。

「又御來意の如く說の當否は第二の問題として、十世川柳があれほど懇切に回答を怠らざりしことは、人格上から云つても立派なもの何かの機會に同師の御推賞は御願申上置候」（大正十四年七月二十九日附手紙）

「十世と往復した質問應答は多い時は四種、紙數少ない時又は他に要件ある時は普通郵便であつたと思ひ升、勿論返信料は何時も添へました、又大槻博士の心附にて平井翁は川柳で立つて居るから丸きり其報酬ではいけまいとの事なりし、御尤のことと存じ一ト月置に僅に〇圓宛紙代として御送付致しました、甚だ寡分であつたけれども、私も其當時は隨分窮乏の最中であつたし、翁は少しも不足がましきことを申さず、非常に喜むで敎へてくれられたのでございます、云ふ迄もなく物質的を離れて　私の熱心を買つて下さつた譯であらうと思升」（大正十四年八月六日附手紙）

當時の東京柳壇は、どんなであつたか、便宜『一糸巢』一三七頁を抜く、

「我々何れもまだ本當に川柳の研究が足らないので全く幼稚なものを選み幼稚なものを詠で居た、第一に柳樽といふものを全部讀だ事がない…古川柳の意味を匝嚼して掛られば川柳を理解する事が出來ない…始めて讀賣川柳研究會なるものを創立する事にした其頃劍花坊君にしろ…擔任して居た日本新聞の新川柳欄で、雷を眞似て腹掛やつとさせ、の古句を拔いて讀者から一本突込まれたり、私（而笑子）がある時の句會で、百旦那の意味が解らないので披講の時面喰つた事などがあつた」

以て大樣が知れよう　丁度同じ頃、百旦那が不明で柳雨翁と十世の間に、

（翁）御寺の施主体の人かの樣にも思はれど如何なる階級の人にて又如何なるタチの人か解らず

あの質屋先住のとき百旦那
過去帳へ首を出してる百旦那
くわうとくじ（下谷廣徳寺乎）下におかれぬ百旦那
百旦那小僧銚子とひたしもの
げつぷうで門を出るのは百旦那

（十世）、百旦那は施主也、各自が家に付寺を旦那寺といふより興りたるものか、此寺旦那則ち施主より其寺に盆と歳暮に心ざしをする高が百文宛の施主也と云しもの也（寺へ付け屈けが百文の旦那と云ふ事也）

此一例の如く通信研究が續行されたもの、六七年前迄柳壇の古老で百旦那の眞意を曲げて、ヘンテコに用ひてゐた人もあるのだから　昔々の事は當然なのである。

× ×

翁の苦心の結晶たる川柳著書に就ては稿を別に詳に說くであらう、狂詩家としては古くより名を馳せて居られ、惠まれたる二書がある、古川柳趣味に因るものが多い、日記は四十數年缺かされない、煙草の嗜好は斷然たち、晩酌は二本、實にうまさうな盃で

「熊谷、犬養兩醫博の保證附、酒は飲んでも差支なしとの事に付、毎日不相變一合ヅヽは缺かさず候、但し此頃は催眠劑として晩酌を寢酒に改め居り申候」（手紙）

とあつたから、これ丈けは入院される迄續けられた事と恐察する、動物學が專門であつたかと知る。

× ×

麻生氏が私を評し　『趣味として　日課として　柳友その他へ不斷の通信をする』云々は、君よく私の郵便病患者たるを知つて呉れてゐる＝（但し其割に君からは通信が少い）＝が私の嫌ひな一事は筆を持つ業で、世にも稀な惡筆だからである、故に短冊を書かされるは侮辱を與へらるる感があり、原稿書きも欲せず、手紙を認めるもおツくうであるが、他から澤山貰ふためには倍以上努めねばならぬと、惡筆惡文の御用捨を願つて居る配達人がよく『お正月のようですネ……』と一束を放込む、小妻と競爭で開封する、心邪なしの境地である、翁は決して返事を遲らしたり怠つたりした事のない人で、然も細字での長い通信に、隨分打あけた恐らく他には漏らされなかつたと思ふ樣な內情迄も、報導せられたのは卯木氏と等しかつた、兎も角柳雨卯木兩氏から　私は信認されてゐたと自惚れる程、頻繁に文通はして居る。

「手紙を出すことには誰にも負けぬと思つてゐたが、蛭子君の筆豆には全く降參、上には上があるものと過日卯木子と話したことでした、卯木君も兄には大分手紙の負債があると云つて居られた」（手紙）

私は節句とか祭日に手紙供養をして度々燒棄するので、今探し集めて四十一通より見當らぬ最近は御執筆に最も御多忙なるを知つて―且は私が餘病を惹起し疼痛にて不快のために―大に遠慮をしてゐた、大槻博士は言海增訂に着手されて以來、返事をかく時間も惜しいと言つて居られた、其事を私は翁にあてはめ

なるべく氣分の邪魔をせぬ事に心掛けたのであつたが、伊東温泉に轉養されたと他からもれ聞き、御見舞と御無沙汰お詫びと同地方地震の模樣とを伺ふべく端書を差出したけれど、返事はなかつた、そして遂にこんな淋しい事になつてしまつたのである、先年伊豆で元氣回復されて中野町へ引揚げらるゝ際は

手廻しな辭世笑うて目出度がり

駄句御笑ひ迄に、とあつたのである、其の書翰の一節に『川柳雜誌三月號、御採錄……

時鳥から皮實をあをむかせ

の句解は、迂生嘗てヨノコロ誌上川傍柳の解說に初鰹說を提供致候へ共一人の贊成者を得ず悉く反對に候へ共今日迄堅く自說を確信致居候處貴兄の同說を得て百萬の味方を得た感有之候」(昭和四年三月六日附手紙)

と　私が敎へを仰いだ最終は、翁が岩波書店から柳多留二十四編迄の簡單な註釋本を文庫として發刊さるゝを聞いてゐたので本誌五月號拙稿（十）御質疑中

（四）御傳馬で行けば矢鱈に腹を立

が二編にあるから『念のため他へ照會してみたら、やはり？印』の、他へは翁の事で、

「御傳馬は實は解釋を要する當面の句に候得共山椒兄の說明丈けでは少しく堪能致兼候に付不明と致置候、其外疑點雜問續々と出て多く不明未詳等として責任を逃れ置候、版行の上は大方より攻擊の矢蝟集可仕、其上にて次篇に追記可致計畫に付是非〳〵御高示の程奉切望候、どうせくたばるなら筆を握つたまま倒れ度候、川柳の爲めには去國時より犧牲になる覺悟にて有之候に付、今更餓に騷くには當らぬこと、やる處までやつて見る迄の事に候、唯出來る事なら風俗志の中下を完了させたく、川柳辭典などは斷念する外に道は之無候」(昭和五年二月二十日附手紙)

私は翁の此の御覺悟の前に、私自らが菲才を顧みず決意する處がある、翁の心を心として今より一層古川柳研究の道に精進するであろうと誓ふ、

今私の身邊は翁の遺著、書翰其他に埋まつて居る、翁及御夫人が伊東の別莊での御寫眞に呼びかけてゐる、私は翁が川柳のため、直に蘇えらるゝと堅く信じてやまない。晩春の空は曇つて、時々雨を降らす襟を合せて肌に冷やかさを覺ゆ、柳壇の偉人柳雨翁が『川柳雜誌』の客員として、寄稿されつゝあつた事の因緣を私共に於て充分意義づけ、弘く其の恩惠と功績を傳へねばならぬ、『川柳雜誌』の進展を、翁は常に見護つて居らるゝであらうから。（四月三十日記　合掌）

井上信子第二句集

『蒼　空』　白石維想樓氏編

菊半截　定價八拾錢　郵便四錢　美しい瀟洒な本です。
閨秀作家の第一人者　井上信子女史の最近の收獲です。
一讀をお薦めします。

發行所　東京市外落合町葛ヶ谷八六五
柳樽寺川柳會出版所
振替東京七六三九五番

月評 卓を圍んで

路郎　紋太
山雨樓　ひろし
琴人　亂耽

近作柳樽　琴人提出

古里はよい腹の子動く心が曇る　縫子

琴人……一寸啄木の歌みたいな辯があるけれども、よい句だと思ひます。婦人の句としてのかなり突込んだ心理狀態を力强く表現してあると思ふ。

亂耽……何うも句全体のリズムが悪い樣に思ふ。

ひろし……各齣がばら〳〵の樣に思へる。心が曇ると云ふのだから隱して兒を孕んで居るやうにも思へるが、古里はよいと云ふ處から見ると出産の心配で心が曇ると云ふ意味にもとれ、内容の捕捉に苦しむ。

琴人……句がばら〳〵だと云ふお説がありましたが、成程これを從來の川柳として其多くのリズム的のものが頭にあるとき、そうした感じが出るであらうが、此句の全体から内容を窺へばそうばら〳〵と云ふ程に私には思はれない。寧ろ斯う云ふ境地に立つたときは少なくも詠はんとすると云ふよりも眞實な氣持を其儘押出した其處に却つてリズム的に技巧を弄さない方が此句としては大變に生きて居ると思ふ。これは女のやがて母となるべき優しい心持から、現在の少しく或る滿たされぬ心持を突込で云ひ現はしたものである。

ひろし……母となる心配からの、心が曇るであれば、非常にそれが輕く投げやりな叙法である爲めに、其の氣持が出て居ないやうに思ふ。

琴人……作者は初心の人らしいが、私はこれで充分に出て居ると思ふ。此句に稚拙といふ點は確かにあるかも知れぬが、女の眞實な氣持を詠つたといふ點に於てかなりに第三者を動かす句だと思ふ。

路郎……若い女が腹に子を抱いての憂鬱さはある程度まで出て居るが、叙法の上に欠點があるので少しく解剖して見たい。「腹の子動く心が曇る」と云ふ强い表現に對して上七の「古里はよい」の「よい」の叙法が弱過ぎると思ふ。「古里はよい」と云ふ内容は第二段として叙法の上から言へば「古里はよし」と强く言切らなければならない。古い俳句の形式に三段切れと稱して忌むべき叙法の一つにされてゐるのがあるがこの句の形式は所謂その三段切れの忌むべき法則に據つて居る。三段切れ必ずしも川柳の形式として不可ではないが、古來の俳句形式に於ける三段切れの排撃が必ずしも意味のないことでない如く、此句も三段切れとして、先程言つたやうな叙法に於ける欠點を露出して居る。假に「古里はよい」と云ふのを生かせば「腹の子が動く」と「が」の字を挿入すれば調子の上に於て緩和されると思ふ。

山雨樓……今、路郎師から句の解剖に就いて詳細に述べられたので、その上に云ふ事がなくなつたのであるが、斯うして提出句として問題視されて見ると可成興味をそゝられるけれども、元々完成された句でないやうに思はれる。所謂素材の儘の荒けずりと云つた感じを拭ふ事が出來ない。唯リズムが散文的であるのに其處に一脈の纒つた感じが窺はれるのは所謂内在律の或るものを握つて居るのにあるのだと思はれる。今少し焦點的なヒ

ントを主体として句を練つたならば 面白いものが出來たであらうと思ふ。

琴人……今、路郎先生並に山雨樓氏のお説は私の考へて居つて云ひ得なかつた點である。それは稚拙と云ふ點は免れぬと 云ふ事を包含して居るので、此作者は兩氏の批評を深く味つて戴きたいものだと思ふ。

ひろし提出

手が一つだらりと出てる春の窓

蒼太

ひろし……グロテスクな句だと思ふ。漫畫の尖端にあるものは、怪奇的な表現をされてゐるものがあるが、或點から考へると川柳の新らしい境地としてグロテスクな 句の要求される日が近い事を思ふ。其點からして此の句は新らしい興味をそそると考へる。

亂耽……勿論此レ句にはひろし 氏の云はれたやうなグロテスクを持つて居るが 下五の「春の窓」と云ふ齣によつてエロティシズムも漂ふはして居る。句の中に溢るゝばかりの（と云へば少々大袈裟であるが）近代感覺を見出す事が出來る。川柳の今後の行き方として斯う云ふ境地もよい意味で多く 詠まれる事を希望する。

琴人……感覺を料理したと云ふ氣持がする。勿論共鳴はする句である。

紋太……成程手が一つだけを考へると グロテスクな感じであるが、作者の見方がグロテスクな見方だけであつて實在其ものは、寧ろ穏やかな美しい場面を想像させられる。此の句を詠んでグロテスクな趣味に耽つて 居る若人を思ひ浮べて面白いと思ふ。

亂耽……稀薄なグロテスクだと思ふ。

山雨樓……此句は興味の外に出て 居ない句のやうに思ふ。「成程エロとか怪奇とか云つた感じを思はせるが、そうしたものが多くの場合興味の處になつてそれ以上に 自分の姿を現はし得ない場合が少くないと思ふ。云はゞ興味の爲めに興味を追ふと云ふやうな 氣分にかられて所謂イージーゴーイングに終はるのではなからうか。此句を寫生句として見る場合表現に於て巧みなものは 確かに受とれるが、其處に作者上つ調子な影が覗いて居るだけ嚙みしめる味合に乏しい 事を遺憾とする。勿論寫生句であつてみれば作者の鋭い深い背景と云つたものを望む事は 無理かも知れないけれども、自分として興味を追かけて居る作者の後姿を眺めると云ふ 以上に出ない。

ひろし……所謂個性とか主觀とか 云ふものを出すためには、作者自身の事を詠ふものだと云ふやうな考へ方をされ易いが、それは謬見だと思ふ。此句のものの見方にこそ確實に作者獨特の個性を出して居り、近代人としての感覺を力强く表現して居る。確かに新しい美を見付け出して居ると思ふ。其點から單なる興味を追ふものとのみ斷ずる 事には贊成出來ない。

山雨樓……僕が興味を 追ふと 云つたのは作者の心境を指したのであつて、此句が寫生句として巧みな表現をもつて居る 事と矛盾するものでないと思ふ。唯斯うした怪奇的な場面を見付け出さうとする作者の 態度に此の句の場合さう思つた儘である。

ひろし……僕は斯うした新しい 境地にある作者の將來に望みをもつものである。

山雨樓 …成程新感覺を盛ると云ふ 事はいゝ事には違ひない。其處に怪奇を目指すとかエロを目指すとか云ふ 片影がちらつく事は面白くないと思ふ。何故ならばそうした方向は遊戯的な分子を含み易い ものだからである。

ひろし……僕は川柳はこんなものだと 云ふ所謂川柳の鑄型に嵌めて作る 川柳家が寧ろ無意義な存在だと思ふ。平井蒼太君は「末稍神經の觸手」と云つたやうな文章を書いて居る新らしく產れ出やうとする 川柳に多大の興味を持つて居る有爲な人と思つて居る。

山雨樓……僕は何も川柳を型に 嵌めて作れとは云はない。川柳家がぐん〳〵 新らしい境地を開拓して新感覺に生きると 云ふ事は勿論結構な事と思ふが、夫れには一つの條件を附したいと考へる。夫れは自分の眞實を曲げないと云ふ前提を置きたい事である。だからと云つて興味やエロを追ふ事が 眞實に反するものだと斷ずるものではないが 少くとも眞實から一歩技道であると 斷ずるものである。此の意味に於て興味を追ひ新感覺のために新感覺を追ふと云ふ態度に 純眞でない分子が雜る事を恐れるものである。

亂耽……下五がもし「夜の窓」とでもなつて居たならば或は山雨樓 氏の云はれる如き興

味を追ふための句になつたかも知れないが「春の窓」と輕いエロテイシズムを配した處山雨樓氏の言葉は當らないかも知れない。

紋太… 御說として山雨樓氏〻云はれる事は尤もだと思ひます。僕は此の句の場合には亂耽氏の云はれるやうに其處に眞實味を持つて居る句だと感じます。川柳として變つて居るからと云つて、夫れが新らしいと推稱するのは考へものではないかと思ふ。

ひろし……僕はどし〳〵新らしい方面の開拓を期待するものである。

紋太……夫れが山雨樓氏の云はれる本格的な進み方であれば大いにやるべしです。

路耶……大抵諸君によつて批評し盡されたやうに思ふ。僕は此の句をよんだ時にうまいと思つた。夫れは內容と表現とがピツタリ合つて居る點、近代的感覺によつて自由な詩を創作した點、單にグロテスクな感じだけに止まつて居ない點等を綜合して感心したのである。尤も近代的の感覺によつて生れたと云ふ事は此の句の獨占すべき贊辭ではなく、他の人達の句にも多く發見し得る所である。川柳雜誌でその例を擧げれば亂耽君の句等は其の代表的なものだと云ふ事が出來る。先程山雨樓君の說かれた眞實云々は人生に、より強くより深く觸れた句と云ふ意味であらふと思ふ。其の點に於ては私も同感であるが川柳が其の人個々の人生に、より深く、より強く觸れた句であると共に又その時代に觸れた句である事も希求すべき一角である事を思ふと、若き作者が近代的感覺による此の句等を右に述べた理由の下に排斥し去る事は出來ない。斯うした句の傾向の落付く處を今暫く見守つて居たいと思ふ。

川柳塔 亂耽提出

資本家とたゝかふによし春の日よ

綠雨

亂耽……現代經濟的機構の曝露、即ち社會惡の曝露と人間惡の曝露とをイデオロギーに偏せず冷靜に詠んで居る態度がいゝと思ふ。

ひろし……慮らく鐘紡爭議を詠んだものの樣に思ふ。溫厚な綠雨氏らしい見方で烈しい勞資の爭ひを柔らかく而もその中に力强い勞働者の意氣込みを表現して居る處がいゝ。

琴人……「たゝかふによし春の日よ」と力强いものを確りと握りつゝ、それを美しく柔らかく詩化して居る點に此の句の生命がある。

山雨樓……僕は何うも他所々々しい感じがするストライキをやつて居る罷業團を揶揄して居る樣な氣分が句の調子を弱めて居るやうに思ふ。元々傍觀的な態度で詠んだ句だらうと思ふが、も一つ迫つて來るものが薄いやうに思ふ。

琴人……成程傍觀的態度と見られる點もあるであらうが、資本家と戰ふ勞働者が資本家と正邪を爭ふと云ふ場合、決死的な重大な問題である。充分に覺悟をしてかゝる、其處に蓄へられた底力、さう云ふ强いものを赤裸々に露出しないで一轉した境地に立つてそして自然の中に隔け合つて此の句が生れたと私は受入れた時に何とも云へない兄弟の落付た力强さが感じられる。

亂耽……山雨樓氏の見方は作者の冷靜な社會批評眼のみを强く感じられてのそれではないか。又揶揄と云ふ事を云はれたが、此の句は寧ろ同情を持つた句であると思ふ。又此の種類の句に對して强い迫力を求めるのはイデオロギーに掣肘された句になり勝ちな傾向を持つものだと考へる。

山雨樓……其處で作者は斯うした微溫的な句にしたのではなからうか、其の點が物足りないと思ふ。

琴人……微溫的にしたと云ふよりも大自然の中にとけ込む餘裕を持つて居ると云ふ處が私には嬉しい。

紋太……解りよいのと力强いのと時事的なのとで一寸面白く思はせられる事が、よく見ると主義の現はし方が生の儘でありはせぬかと、其の點を忌みたいと思ふ。僕は「よし」を「よき」として「春の日」に句の心を集めた方がよい事はないかと思ふ。

山雨樓……「よき」とすれば作者の主觀が一層鮮明に受けとれる樣に思ひます。强さは減るかも知れぬけれど……其强さが僕の好まぬものを含んでゐる。つまり「よし」であれば主義の宣傳的な匂ひが含まれるやうに思ふから：

ひろし……どちらにしてもさうした宣傳的な意味は全然此の句からは受けとることは出來ない。「よき春の日」であれば春の日を

讃へる事になり、原句の儘なれば資本家と戰ふことに主力が置かれ、全然意味の異つた句になつて了ふ。僕は力強いものを柔らかく表現されて居る原句に賛成であつて、川柳を凡て直線的に感受しやうとする事は凡ての場合に正しいとは云へない。曲線的なリズムから受ける感興も又喜ぶべきではないかと思ふ。

路郎……「たゝかふによし」と云ひ放つてゐるが、其實闘つたつても駄目だと云ふ感じが感じられる。夫れよりも春の日に融け込もうそうする事が資本家に打勝つ事だと云ふやうな稍アイロニックな感覺から生れた句ではないかと思ふ。眞に作者が「たゝかふによし」と感ずるなれば烈日の下にこそ其強さが表現されると思ふ。此投げ出した詠嘆的の「春の日よ」からは眞に資本家と戰ふ意思を感ずる事は出來ない。

ひろし……綠兩氏の人柄から考へるとさう解釋されるのが一番適當だと思ふ。

紋太……人柄と云ふよりも此の句の下五の持つ感じから確かにアイロニックの感じを受けることが出來る。

亂耽……路郎氏の考へ方では「たゝかふもよし」と云ふ場合と同じになりはしないか。又「春の日よ」と云ふのは人間性の弱點と上の齣との關聯によつて生きて居ると思ふ。つまり冷靜な態度と云ふのは其處を云つたのであらふ。

路郎……「たゝかふによし」と「たゝかふもよし」とは同じ意味ではない。「もよし」の方は「も惡し」と對照的に傍觀的で、諦め的であるが、「によし」の方は闘つたらいゝと斷定的な云ひ方であつて、而もその裏に此句の場合には闘つても駄目だと云ふ反語が含まれてゐるのである。其點非常な徑庭があると思ふ。

路郎提出

日曜日どこかで釘の音がする

素人

路郎……近代生活者の疲れた心持がよく現はされて居る。他所事のやうに詠つてゐるところに非常な興味を感じた。

ひろし……松山で呑氣に暮してゐる素人氏の氣持が疲れた後の一杯の番茶のやうに匂ひ高く出てゐる。

山雨樓……日曜日に釘を打つて貰い度いと言ふ妻の心持を詠んだ句があるが、此句はさうした境地を客觀的に眺めた作者の生活を匂はしてゐる。他所事である釘を打つ音が作者ののんびりとした頭に面白く響いたのであらうと思ふ。川柳味を摑んだ句であると思ふ。

路郎……僕は少しく異つた考へ方を持つて此の句を視てゐる。先程ひろし君が松山で呑氣に暮して居る素人君が云々と言はれたが、素人君は此の句から觀れば決つして呑氣に暮しては居ない。かなり強く神經を尖らして生活して居る。而も生活に疲れて生きて居る。山雨樓君が同じく作者がのんびりとして他の人の釘を打つのを聞いてゐるやうに言はれたが、此の句を詠むと日曜日に釘でも打つて呉れと女房が要求して其の釘を打つてゐる光景を思ひ浮べて、釘の音を聞いて居る程それ程、のんびりした氣持を感ずる事は出來ない、否そうした光景を思ひ浮べる程の餘裕すら持たない程句主は生活に疲れ、神經を尖らしてゐるのである。私は句主のさう云つた主觀がぐん〳〵迫つて來る點に此の句の意義を感じる。

ひろし…僕は全然反對に考へます。「どこかで」と云ふのであるから、其の釘の音はそんなに鋭くはないと思ふ。此れが齒車の音であれば、鋭いベルの音であれば、路郎先生の仰せのやうにとれるがどこかでと云ふ處から感じて作者が日曜日に寢轉んで遠くに聞へる釘の音を夢の國の如く聞いて居る春の日の麗らかさを僕は思ひ浮べる。

琴人……打たればならぬ、又打つてやりたいが、それは何うする事も出來ない。何處かで釘の音がする。其ザレンマに落ちた自分を詠つて居るのだと思ふ。

亂耽……「どこかで」は作者の周圍のゝんびりして居る事を現はしてゐる。併し作者が路郎氏の説の如く生活に疲れ神經を尖らして居ることはうなづける。

路郎……「どこかで」と漠然と言つた處に作者の疲れた投げやりな態度を感じるのであつて、もし作者が疲れてゐない人、神經を尖らして居ない人だとすれば「どこかで」と表現するよりも寧ろ「隣で」とか「裏の家から」とか今少しくはつきりした描寫に出るやう

に思ふ。夢の世界のやうに鈍角的に感じて來る處に此の「どこかで」と云ふ表現が生き、同時に作者の生活の疲れと、神經の尖つた點とが出て居ると思ふ。

山雨樓……先程路郎氏が述べられた此の句に對する感じは宛然路郎氏の鋭さを示されてゐるので、自分が皮層に上つ面だけ見て居た點は、句の味はひ方に格段の差かあつた事が大變に參考になつた。五處で斯う云ふ事も考へられぬ事もならうかと思ふ。藝術の道にいそしむ誰もが持つゆとり、さう云ふものが作者の此の句に於て捕へ處ではなかつたかと思ふ。成程作者はそんなにのんびりした境地を持つて居らないにしても生活の疲れ深ければ深いだけに又夫れを泳ぎ切らうとする熱意とゆとりを持合すものではなからうか、即ち句主は偶々日曜日の周圍がひつそりした中に釘をうつ主人を云つたものを見出して其處に自分の姿を見較べて居ると云ふ餘裕をひらめかして居るのではなからふか、丁度急流の中でもまれた岩のやうな鈍角の中にどつしりとした背景の中に、どつしりとたものを持つて居る樣に思ふ。日曜日を捕へた事が何處迄も句主の低徊趣味を表はして居る樣に思はれてならない。

紋太……僕は皆さんと別に、僕だけの考へを述べさせて貰いません。僕は此の句を見た時に上五に一つの熟字を持つて來る事は損んだなと思ひました。つまり日曜日と云ふ言葉は休日、何時もと違つたのんびりさを思はせる。それから「どこかで釘の音がする」と云ふのも普通に矢張のんびりさを思はせる。のんびりとのんびりがかち合ふから平凡な感じしか出ないと思ふ。僕は素人さんが傍に居れば平凡な句ですねーと云ひたい。それよりも此句を字句通り解して日曜日家に休んで居ると柱の釘が釘箱の釘か、兎に角釘と釘とがふれ合ふ音、或はさゝやく音を耳をすませて聞き澄まして居ると云ふ樣な作者の考へ方であつた方が面白いと云ひたいやうに思ふ。

ひろし……それは又神秘的ですね——

紋太……つまる處餘り深く考へさせるものがない。在來の平凡の句とより思へない。

路郎…釘と釘と觸れ合ふとか、釘のさゝやきだとか云ふ解釋はです伽噺の樣な解釋であつて此の句からさう云ふ感じを受ける事が出來ない。もしさう解釋することが出來るとすれば、此句は決して紋太氏の云はれるやうな平凡な句でない。併し僕は何處迄もさう云ふお伽噺的な感じを此句から受けとり得ない。

紋太……僕は他所で釘を打つて居る音を釘の音がすると略した處からさうも解せると思つて少しこち付けた説明をして見たのでありますが僕のとり方は普通に解した結果平凡だと思つたのであります。（杏三筆記）

定評ある神戸の「ふあうすと」を御存じない方は
月刊。菊版十六頁。誌代一ケ年一圓貳十錢也
神戸市花隈町四七八
ふあうすと川柳社

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋が出來ました。左の價格でお頒ち致します。此用箋を御使用下さい。

百枚綴一冊　價金拾參錢（送料共）

◇御申込は本社事務所宛（一錢切手代用可）

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさはしい簡素な裝幀に出來ました。

第一卷　各金五圓也
第二卷　各金參圓也
第三卷　各金參圓也
第四卷　各金參圓也
第五卷　各金參圓也
第六卷　各金參圓也
當分第五卷に限り　**特價金壹圓五拾錢**
各送料十八錢

尙古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第四十七號まで　各一部　金拾錢
第四十八號より第七十一號まで　各一部　金貳拾錢
（但し一號九號十二號廿一號廿五號廿六號廿七號はありません）

川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇

粒々集

御影　長崎柳秀

頬張つて〳〵居て猿は喰ひ
飲めぬのが無理に稽古をすると云ふ
食堂の見本へ女立ちごまり
機は逸すべからず夜襲氣が揃ひ
ふたりとも乳母で育てりや良いものを
野外劇斬られた所でひと寢入り
ビステキに皿まで切つた音を立て
緊縮と別に娘の荷ごしらえ

松山　前田五健

あれが君ヴアンプなのかい太い足
悠々と世相に用のない遍路
さればですその氣になれば出る笑ひ
蔦の家蔦の襞から啼く蛙
冷たさの言葉奇麗に吐き出され

大連　大島濤明

地に落ちて仕舞へば涙跡もなく
情念の焔に背く半風子
陽炎の中に失戀立ちすくみ

主觀句の研究（三）

福田山雨樓

明治文壇の花形　自然主義文學勃興期の寵兒たる田山花袋氏は、曾てその『描寫論』（明治末期好評なりし論說）の一節に次の如く述べられてゐる。

『主觀と云ふと、人はすぐ思想とか判斷力とかに持つて行きたがる。しかし主觀にも無數の度數がある。ピンからキリまであるのである。青年時代の主觀もある。中年時代の主觀もある老年時代の主觀もある。これは縱から見た主觀の度數である。經驗の多い人の主觀もある。經驗の少い人の主觀もある。經驗したり風問したりしても更に大きな影響を受けない人の主觀もある。これは横から見た主觀の度數である。だから作品を見て其作家の主觀如何を點檢するやうになる批評家及論者は一度を進めた批評家及び讀者であると私はいつも思つてゐる。

この人の作品に顯はれた主觀は、何の位の程度の主觀であるか、この作者の作品に顯はれた主觀は、何の位の主觀であるか批評家及び讀者は先づ第一にさういふところを見なければならない。主觀が思想や判斷になつてゐるか、それとも作者の總てから出て來る感じになつてゐるか。これを見分けなければならない。そしてまたその感じの無數の度數を點檢して見なければならない。更に詳しく言へば、批評家及び讀者も自然に似た心を持つて作品に向はなければならないのである。

これは今日の文壇に例を取つて見ても直ぐ分る。昔の作家は落ちを考へた。序破急などいふことをも考へた。今の作家でも思想を得、構圖を得てこれに肉をつけたやうな作をする人がいくらもある。さういふ人は現象から生々としたものを捉へて

來たのではなくて、思ひ付きから得て來て作をするのである。主義、主張の方便に藝術品を遣ふのと　いくらも違はないことになる。淺薄ならざらんと欲するも得んやである。』

即ち當時の自然派文學思潮の尖端を貫く快文字であつて、科學的精神亜に物質的傾向の影響による時代思想の背景に温醞されて、生るべくして生れたる自然主義文學主張の一面を明確に表してゐるのである。しかしこれ等の言葉は、主として小說に關する限りに於て、且又當時の自然派かそれ以前の浪漫派のセンチメンタルに墮した、唯やしいとか可笑いとか云ふ遊戯的分子の多い、所謂風流娯樂の用に供すること云つたやうな、漸く鼻に付きかゝつた舊文藝に對する啓蒙乃至反動轉向運動として起つたところに、即ち自然主義の出發態度として味ふべき、首肯せらゝものがあるのであるが、同氏が『新傾向の俳句』と題して

『新傾向の俳句は飽くまで描寫で行かうとする運動であるらしい。說明的、斷定的になることを第一に嫌ふ。それから作者の心持で物に對しての解釋をつけることを嫌ふ。あはれとか悲しいとかいふ主觀的感情を加へることを絶對に避ける。

梅一輪一輪づつの暖かさ　嵐雪

此れには餘程作者の感じた主觀が入つてゐて、一輪一輪づゝに暖くなつて行くといふ處に手柄を認められてゐるのであるが其處に却つて作者の小さい解釋見たいなものが附いて居て面白くない。何だか自然を拵へたやうな氣がする。

梅咲いて湯殿の崩れ直しけり　利牛

これなども梅が咲いたが爲めに、湯殿の崩れを直すといふ作者の趣味から來たやうな處に小主觀的のいや味がある。湯殿の崩れを直すやうなことをしない人から見ればこの作者の趣味が甚だ低いと云はれるやうなことになる。これは內容のことだが、內容の是非でなしに、自然に對する見方から云つても梅が咲いたから崩れを直してゐるといふ風にせずに、梅が咲いた其處の主人が湯殿の崩れを直してゐるといふ風に見れば其處に描寫――新傾向の味はひが出て來る。作者は主觀の解決を加へずに作者が自然からさういふものを見たと言ふ風になる。從つて大きな解決のついてゐない自然が陰に無限に現はれて來るといふことになる。いかやうにも其處から味が出て來る、（後略）』

と述べられ更に『印象的描寫』と題し、『長い叙述よりは短い描寫』と私はいつもかう思つて筆を執る。

何んな文章や小說を讀んで見ても生々としていつまでも頭に殘つてゐるのは　矢張り描かれた箇所である。理屈でもなければ思想でもない。

描かれたものは常に具象的である。常に嶄新である。描かれ

たものはそれ自身の價値を常に語つてゐる。

此頃唱導されてゐる新傾向の俳句といふものは、その意味に於て甚だ面白いと思つて私は見てゐる　難解に過ぎるやうなところはあるが、あれは描くといふ上からみた自然の結果で、それを見る眼を持つた讀者には別に不思議にも難解にも思はれまい。（後略）

と暗に新傾向の俳句が描寫的表現に進んで行つたことに、賛同して居られるのは、その當時の自然主義の主張を以て、小說以外の詩にあるべき藝術作品に對する批評なり、希求なりに迄及ぼし、自然主義の主張を以て文學の全面を覆ふことの出來る一大通則でゝもあるかの樣に、考へ過ぎられたのではなからうか。

なるほど詩の表現に於て、低級俗惡な趣味嗜好乃至小主觀が鼻につくやうでは、決して上乘なものとは言はれまい、ごこ迄も作者が深く自己を掘り下げた、深い鋭い大きな主觀の發露であることを望むのは、自然主義の主張を待つ迄もなく明かなことである。殊に花袋氏の述べられた如く、主觀の本質としては全我的な、自然が人に迫つて來る底の大きさに觸れなければならぬと云ふことは味はひ深い提言をされたものであるが、俳句の如き詩にあつても、描寫の心を持つてその本質を盡し得らるゝものゝ如く主張せらるゝことには、俄かに賛同出來ないと思ふ。

小說はごこ迄も客觀に徹した、眞實の像を寫さうとする表現であり、描寫することに自身に於て當面の直接な興味と主義とを持つものである。つまり藝術することそのこと――藝術のための藝術――が目的地なのである。

詩はごこ迄も主觀の感情を、活調し、主觀上に於ける欲情や生活感やを訴へるべく、目的に向つて一直線に表現するものである。つまり主觀の生活觀念を追ふことそのこと――生活のための藝術――が目的地なのである。

即ち小說が表現する描寫の行き方をもつて、詩の行き方を律することは當らないのではないかと思ふ。

けれども、小說と詩とが各々異つた人生觀的見地から、作家の態度に相違があるにしても、一度藝術として表現され、藝術として批判を受くるに當つては、單に表現された作物から、藝術としての純粹な値――藝術としての藝術價値――をのみ問はるゝものであることを忘れてはならない。即ち藝術の價値批判は『美』であつて、この基準された點からのみ作品の評價は決定されるのである。

しかして美の種目に就ては、小說が求めるところの藝術至上主義の審美觀に立脚した種類の美があると共に、詩が求めるところの温熱感に富んだ、より燃燒的な、云はゞ音樂の陶醉に似たやうな種類の美があるのである。つまりこの兩者の美に對する趣味の相違は、主觀的な藝術家と、客觀的な藝術家との間に始めから像定せらるべき當然の歸結であつて、美の價値を評價する決定的な區分ではない。

只主觀的な藝術が恐れねばならぬことは、詩が情熱的である反面に陥り易い缺點として、安價な感傷性や、過敏な感性を露骨に生のまゝ表すことである。よしそれ等のものが詩人の僞らざる主觀の發露にしても　藝術としての鑑賞を賞ふには、詩を生かすべき、詩を具象化すべき用意と修練を缺がしてはならぬと思ふ。

この意味に於て、花袋氏が賞讃された新傾向俳句の、その先驅者たる碧梧桐氏が昨年（大正十五年頃）機關誌『三昧』に於て述べられた次の言葉を心して味はひたいと思ふ。

姉の膝に寢入つて教會の別れの頭撫でられ　四十起

『表面には多少のユーモアの籠つた輕い氣持ちが浮き出てゐる。內面には、幼い子供に對する痛切な愛が潛んでゐる、事實はたゞ散會時の牧師が、寢入つた我子の頭に手をやつたゞそれだけである。が、其の牧師の手に、溢るゝばかりの暖かさと慈を感ずるのは、其の一に對して親の情としての熱愛を持つからである。若し子に對する愛を感じてゐなかつたとしたら、牧師の手も、たゞ棒切れの動いた無關心の事實として消滅したであらう　笑ひの奧に涙のある、といふのはこの作にうつてつけの評言である。

この作者には、ともすれば其の主觀を暴露する言葉を投げ出して、そこに新しい詩の世界のあるものゝやうに振舞ふ癖がある。主觀を暴露する言葉を投げ出すのは自己の眞實ではあらうが、最早や詩情ではないのだ。一概に律することは出來ないが主觀を環境に具體化して環境の事相に口をきかせる處に詩が生れるのだ。そこに感情のデリケートな顫へと動きが籠るのだ。其のデリケートな顫へと動きを暴壓するか、粗雜に磨りへらしてしまへば、最早詩はないのだ。主觀を暴露する言葉を投げ出すことが、たゞの叫び、若しくは座談になつてしまふ所以はそこにある。

『牧師が寢入つた俺の子の頭を撫でたのが堪らなく悲しかつた』これではたゞの座談若しくは散文であつて詩にはならない。其の悲しかつた感情の細かい顫へと動きは暴壓的に押しのけられてゐる。詩人の情緒も、之を暴露すれば、むしろ俗人の言葉になつてしまふ。

恐らくは一時的迷路への彷徨であらう、と思つてゐたこの作者が、かやうな完美した句を成し得たことに驚異の眼を睜らねばならなかつた。主觀の暴露も亦詩の一體であるといふやうな反抗的な理論から目覺めて、其　香ひ高い天分を踏み荒す暴虐から蟬脫してほしい。

『新しい詩　それが如何に誤られてゐるかの多くの事例を知るものにとつて『古い詩に』泥む人達よりもむしろ恐るべき敵であることを痛切に思ふ』

自分は今まで俳句に付てあまりに關心をもち過ぎてゐたやうだ。これから川柳に付て詩が必然的にもつてゐる主觀精神を如何に具象化してゐるかを振返つて見たいと思ふ。（續く）

川柳塔

□
□
□

○　福田山雨楼

障子は秘密をもちこたへなかつた
皺くちやな紙幣がお米を待つてゐる
漬物の石が養子をこらへさせ
こゝ切れてから醫者の辯解
氣紛に格子をくゞる蚊が二匹
地聲出したら商賣になりませぬ
神棚の榊こつそり葉を落し
夕刊賣にたのもしき西陽なり

○　住田亂耽

KOBE　二句

起重機が動く倉庫の上に海
商館の入口に居る印度人
くづれたる苺の味のパンドラよ
合理化の刃が首の眞上なる
車庫の外歸る所がない電車
店の方針も女給も行きつまり
宿の湯のラムプ花袋も老ひにけり

丙種合格

司令官へゆつくりお辭儀して下り

○　出口雨町

淋しくはないかゝ云へば首をふり
口は口眼は眼心は奥にあり
表現はせねゞ惡魔は惡魔なり
笑はれながら流行のただなかへ
紙屑ゝゝもに彼女も捨てられた

女さへなければ金をためてたに
緊縮はむしろあなたにして欲しい
下は見ないことにしてゐるブルジョアジー
資本家にまだ充分でない利潤
五人目にやつと生れた男の子
喜こんでやれば悦こぶ好々爺
一年はぢきにたつよと見送られ
奥様の見かけによらぬ値切りかた
當然のやうに看護婦はらまされ
タイピストすでに課長の眼にかなひ
畫行けば女給キセルで喫ふてゐる
湯上りのあれは玄人やなと思ひ
藝妓もう斷然ほれたやうに云ひ
且那もうあの妓でなくちや承知せず
成功を誓はせてゐる許婚

伊藤愚陀

○

肩上はもとらぬ戀なり春の雨
嘘つききつた重き夜なる
首を並べて春の汽車行く
轉ぶ球なり轉ぶ球なり戀すまじ
空がゆれ木がゆれ二人默るなり
心病み居る壁守り居る
まほろしに唇の痕おほかりし

松盛琴人

○

小遣に困つてゐれば天氣よし

文樂座にて（一句）

文樂を見てりや失業なんぞなし
すつかり遊んでしまつた滑らかな眠り
あのひよろ〳〵とした街路樹の虛榮

ブルジョアへ

高枕たまには怖はい夢もあろ
愚痴もきます涙も流しませう
女房へそう惚れ切ちや居られない
乞食の夢に朝日がさしてゐる

岩本素人

○

信心は出來ず醫者には見離され
さあ酒だ動脈瘤も醉ぱらへ
現金なものさ夫婦も金の嵩
ないとも云へぬたつた十圓ないのなり
貸せと言はずば恥もかゝざり
家賃値切れと言ひ付けて出る
店賃の返事はなくて左官が來
髷の結ひたて眼をむいてゐる
長いつきちりけを甜めてゐる樣な

伊藤綠之助

○

還蛙過ぎにし春を思ふなり

木の芽みな動くと見たり今朝の雨
ぺこ〳〵となれしにまかせお辭儀する
若人は飢えず青天白日旗
百姓に米のなくなる日が來るぞ

水谷鮎美

○

木細工の人形はこけたまゝの春
落椿唄ふ彼ではないのです
夢一夜草笛吹いてるたりけり
おしろいの鼻は大きく横をむき
腕ぐみのふたたびもぐる良き心
患へば赤き椿の眼にしゆめり
かけぐちをつゝぬけに聞く風來坊

觀月君の新婚を祝して（五句）

壁白う障子明るい二階に居
獨身の頃の飛白を出してくる
新妻と手をとりあへば新派めき
郊外に住んで夫婦のよく出かけ
美しく雨見る夫婦二階に居

ある友に

石投げて君と歩いた長い橋

中島鐵洲

○

旅の話しにお茶漬の冷え
食卓を變へやう今度産れたら
鋭角に生れて春を煩し
結局は赤くもなれぬ馬鹿なりし
ハンケチの白さ工場視察員

松丘町二

○

草の芽生るそこは悲しい床の下
街燈あをく濡れてゆく幌
チョコレート臭きキッスを受取りぬ
算盤玉の如く並びたり兵隊の顔

朝田新水

○

やがてくる婚期女給をつゞけたし
四ン月だ一度位はすしも卷け
近眼鏡しかも女の首細く
利己主義の一つに樓主數へられ
黄いな顔女房でなくてそれでよし
口入屋雇はれ度しに儲からず
新妻のもう早々に薪割る

太田朝陽

○

驕慢な事を血筋にしてしまい
生涯を賴む話しへ宵の雨
荷かざりの批評が母の氣にかゝり
ほめられた荷かざり重く運ばれる

淡輪にて

寫眞機で貝取る娘追ひ廻し

橋本綠雨

○

生みの母があるかと女問はれてる

神經を尖らし資本家は控え
色町を問うても子守まじめなり
封筒はおもたくもなし懐手
月もさしてくれるし一軒家に住む

丸山公二

◇

囁いたあけくに雇うてもくれず
働いた金だ銀行たよりない
生きる試練とは氣強い事を云ふ
出世しろしろとは國の便なり
星月夜しきりに汽車の笛がなる
小賢しき女も金につられしか
運のない亭主の白髪抜いてやり
極道のごこになとある金のつる
幾山河越えて來たのに出前持

中見光路

◇

施しのつもりでお叩首して置かう
兵古帶をやたらに廣う十五日
ちと莫痴になつた氣になる四十過ぎ
市場までのに銘仙といふがいり
肥えられたことを云うても世辭になり

中澤濁水

◇

孫を抱き錢を握つてぶら〳〵出
珊瑚屋はちつとも切れぬ音で鋸き
重傷の癒れば癒るのに呆れ

算盤がかつちり合つた獨り言
砂利の町遲刻の足をひよろつかせ
出支度の足袋の中から足袋を撰り
忙しさあれもこれもこたくすなり

熊本黄峨

◇

氣のむいた時には話す女にて
啞の娘が一人ゐるとのきゝ合せ

生田翠夢

◇

目前の享樂へのみの努力にて
ビヤホールのまひるがらん堂に一人ゐる

若井たけし

◇

春の夜の友の厨をきいてゐた
その中にはこべの花も生きてゐる
櫛をなけたゐ春雨の午後
働くに腹卷きばかり味方なり
あきうごの何を背負つて行くのだろ
何の興もなくネクタイをむすび

櫻井圓角

◇

斷髪の型とは別なラブをする
オポチュニストとう〳〵こつちめられて居る
女房をほつても置けぬ心齋橋

森石竹

◇

濡れ鐘がなる宵寢するかな
芝草がむず〳〵起きる淋しさに

かなり久しくこ云つたしたしみがある
子よ眠れ夢は大人の見るものぞ
夫婦して草をむしつて御覽なさい
麥飯のほろつく味こ茶の澁味
でゝ虫よもう泣かぬから木を登れ
裸足になつて仕樣がないのです

阿部閑生

◇

いゝ事の成りし淋しさ櫻んぼ
熱心になればなる程道化めく
この人も他人でないこ思て見る
毆られてきた眼にうつる我家の灯

西村市公

◇

思ひかなつて勢を出す雜布がけ
退けの笛鉛筆の字も大きまゝ
のけ反つてゐる獨身が羨まれ
空想の中の給仕が二度呼ばれ
注意され乍らに踏んだ御飯粒

須崎豆秋

◇

大濱にて（二句）

蛸つぼを引き上げにゆく春霞
人間が三升程の灰になり
ボロクソに云はれ大きな門を出る
情婦ふこするめを出して燒きはじめ
うつぷんのやり塲に猫をひつぱたき

植田湖舟

◇

カルテに見えた俺の命よ
レシーバで聞く本壘打あつけなし
首筋へ春を知らした風が吹き
寢て居れば人のあら等考へる

松村敏郎

◇

エスこ佛母の法事のもめてすみ
ハイヒルを履くなお前は女中だこ

濱井隆登氏の結婚を祝す

起し手が出來てアラーム忘れられ

桑原京郎

◇

顏から惚れたも無理はないく
なんせもう不景氣なので手を焙ぶり
逢ひ戻り鋪裝道路が響くなり
取り入りの巧さが鼻についてきた
窓先の埃も春のにほひなる
借つて來て返すこお前そんな氣か
高所から見ればで髭をもみ上げて
生眞面目なのもうるさがられる
酒の味女のにほひイエスさま
もう一度化けてくるよなこごちやなし
病人を笑はせるのに汗をかき
添ひ遂げて見せる氣針をしごく指

楊井二一南

◇

仔猫を飼へば隣りも覗くよ
金入れこ云ふのを女三つ持ち

柳雨翁逝く

麻生路郎

九州醫專病院に入院加療中であつた本社客員西原柳雨翁が四月二十日五十三歳を一期として溘焉として逝かれた。翁は夙に古川柳研究家として知られ、古川柳の分類編纂、註解敷衍に於ては第一人者を以て容されてゐた。

翁多年の研鑽は、單に川柳家を稗益したばかりでなく、弘く江戸趣味者、江戸風俗史家の唯一の經典とまでされてゐたのである。その功績の偉大さは今更喋々を要しないところであらう。

研究すべくあまりに參考柳書の少ない古川柳に對して、山口、久留米、名古屋等にあつて研究を基礎づけられたことはその精根の絶倫さを思はせられるのである。約三十年間に亘る翁の研鑽は新聞雜誌への寄稿は勿論、多數の著書となつて其の價値を世にとはれてゐるが、尚幾多の未定稿を遺して隔世されたことは斯界のため悼惜に堪えない。

翁の著書の主なるものを列擧すれば川柳江戸歌舞伎、川柳江戸名物、川柳吉原志、川柳滕栗毛川柳參尾志、川柳風俗志、川柳難句類解、川柳から見た上野と淺草、川柳雜俳集（日本名著全集第廿六卷）柳多留（岩波文庫ノ中）等であらう。殊に川柳雜俳集の校訂か、一般川柳家に歡迎せられたことは、その分賣の古書が豫約定價を遙に凌駕してゐたのに見ても察知することが出來やう。

右に擧げた著書以外、新聞雜誌に發表された研究題目は枚擧に遑がない位多數に上つてゐる。本誌も又、古川柳研究については翁から玉稿を多く仰いでゐる。

今や、その翁亡矣、悼むべく、悲しむべき限りである。

（因に翁の令嗣は鄕國久留米市櫛原町三丁目六一番地に居住されてゐる。寫眞は翁が伊東溫泉の鈴木別莊に病を養つてゐられた時のもの、昭和三年十二月十三日撮影。向つて左は春代夫亡人）

竹馬居雜筆

蛭子省二

（十一）英雄主義の劍花坊氏――（自選句集を見て）

「昭和新興川柳自選句集」が着いた時、一讀後の感想を十數枚の原稿にしたのであつたが、風邪發熱中にものした故か、讀返すと支離滅裂で自らの意にも滿たず破棄してしまつた。月を隔て今又句集を机上にして居る。何にか書留めてみたい氣になる、敢て文藝批評をするつもりではない。そは本誌の「柳界時評」にでも讓つて、ほんの氣輕に一言してみる。

現柳壇の？は＝それは柳壇の内情に疎い私丈けの事であるかも知れぬが＝井上劍花坊氏であらう。今假りに昭和五年に氏がゐないならば、如何に寂寞を覺ゆる事か、「新川柳に現はれたる社會の顔」を提供して呉れたり、此の自選句集を纏めて呉れたり着々こやるこ言つた事を遂行してゆく、愚痴許りに終始してゐない斷な態度は、寔に一箇の刺戟である。あの『川柳人』誌の不變の永續性舊風に對してでも、川柳家は頭をトげねばなるまい。

句集に參加せられた百二十數名の人々は必ずしも、井上氏の周圍ではない、果してどの人こどの人が秘藏の門弟であるか、私は詳にせぬ。

餘事に亘るか、柳誌に投句したり、其社の例會に出席したりすると、モウ弟子あつかひにする通弊がある。況んや社へ出入でもしたが最後のつびきならぬ始末になつてしまふ。柳壇程安直な師弟關係の結ばれるはない、寧ろ滑稽事である。某氏が―其時醉つてはゐたのだが―「蛭子君は私の弟子デ…」とSに紹介された時は聊か面喰つた。私には川柳誌上の特定した師匠などは斷然ない。全川柳家に敎えられるけれ共絶對に某氏の弟子でない事を明言して置く。

で特に人を限つて作品を味ふ興趣を缺くのは殘念である。將來自選句集が續出するだらうこの見方は誤らない。現に先鞭は大連の『川柳大學』がつけて居る、自選句集にも二樣あらう。

（一）一流作家のみを網羅した權威あるもの。

（二）頁の割當金を定め何人をも參加させる。從つて出金さへすれば何頁でも塞げ得る雜然たる内容のもの。

後者は常に獨斷的自己陶醉に陷り易い、詩的價値率は高くない夫れ丈け出版方法としては極めてお手輕な　なかば策略的の樣

にもうけ取られる、イイ氣なものでもある、

笑つても涙のあとは隠せまい
本當の年は化粧でぬりつぶし
太い腕に看護婦の金時計
年若く云はれて唯笑ひ
拾ひ錢賽錢に利用して祈り

等等、戸迷ひして新興に誘致されたことは思へぬ程の幼稚な句＝恐らく傳統派なら直に沒にする＝をも負擔金の手前、印刷せねばならぬ悲哀な苦衷を御同情せねばならぬと同時に、

暴力を秘めたダイナマイトの圓み
寶石だかモチヤだ勳章だ棺桶だ
友情を歪めて持つて來たダリヤ
監獄と墓が待つてる搾り糟
盃のテンポ淋しく獨り飲む

なぞをもやはり新興と極印を打つて一冊の百八十頁を裝釘する、感覺に叡智を疑ひたくなる。次いで私が、『昭和新興川柳自選句集』を見た時に一抹の不安に襲はれたのは、投句者の年齢が私より若いお方々のみであるのは氣強くも思ふが、さはいへ年々歳々異動變轉泡の如く消滅する青年川柳家の多い事はお互に知りすぎて居る。これらの新興振りの士が私共の年になる迄、眞に川柳詩に理解をもち續けて呉れるかどうか、恐らく其の半數は此句集を墓塲として眠つてしまふ人々でありはせぬかと思ふ時に、句のヨシアシを眞劍に詮議する前に、惻隱の情に驅られ肌に粟さへ生ずる。私は井上氏の氣の若い事を御祝着申上げる。老ては此種の自選句集の世話をする氣力はないものであるから。

そこで私は井上氏の作丈けを見直し、句集に感謝して置く力が、一番怜悧で幸福であるを知り、始めて上述の氏のその若干が味はひ得よう、氏が近く擡頭したプロ藝術＝プロ川柳＝を高唱さるゝ處からは、豐かな流轉性があるのであらうか、否そは流行性だと某君が言つた、そうかも知れぬ、『日本及日本人』誌の作品を檢すると、どうも所謂尖端趣味家だとは受容られぬ、久坂玄瑞式川柳を說くべき人で

金冠にある夜笠置の松の露　劍

『僕のやうに幼時から簑釘で勤王の血を注射された長州出身の男にはこんな句も詠みたくなる』といふのが本音らしい、あの久坂玄瑞の一文中にも隨所に斯種の氣焰が上つて居るではないか、

（一）安川氏云、（れこ柳誌上）

衣食足りて戀愛を知る　劍

作者は現在左傾派の若い異分子を門下として川柳にプロレタリアを旺んに唱へてゐる關係上、多少ブルに反抗的の句作を見受ける…昨今の作品を見て一向に新し味も無ひ依然昔のままの劍花坊式の句であるのは遺憾の極みである…川柳の無產運動といつた風雲に徒勞してゐる老人劍花坊氏は日本柳壇の牛耳を握るには相應しくない、…ただ言辭のみに無產やプロの匂は川柳として價値のないものである

（二）椙元氏云、（ふあうすと誌上）

劍花坊氏の句風は世にも褒貶の多いものである…亂暴だと思ふ程誇張された言葉を使ひ、苦笑したくなる思想を遠慮なくぶちまける、

直ちに受容れ難いやうな句、救い難いと思はせる想などを往々に見受ける、立派な狂句だと思ふ時すらある。

(三)某氏云、(曾て井上氏に師事したことのある人、私信の一節)

劍花坊氏の句を云々するは本意でありませんが、十年前の句と今の句とでドレ丈けの進歩があるかと考ふる時に、人々に因て見方も違ひましようが私は只變化したのみで、昔の句の方が川柳としての眞價値があつたと思ふ、私の頭が古いせいでしようか。

奉納の金はしぼつて取つた金　劍

變化丈けではありませんか。

咳一つ聞えぬ中を天皇旗　劍

そういふ劍花坊調を川柳として私は好みます

參考として三氏の意見を引照してみると、氏のプロ川柳なるものが靈肉一致の感銘であるか體驗の賜であるか、柳壇では？として攻撃して居ることが知れる、或は机上での或は轉がつての製作ではないかと、自選句集の卷頭第一吟が

ねころんで考へた事世に合はず　劍

は頗る皮肉に私共へ訴へらるる氣もする、全く寢轉むで考案したプロ川柳では世に合ひそうもない、

二三行書いて日が經つ　原稿紙　劍

プロ川柳論を二三行かいては日が經つかの如くにも解せられる

私は氏が往々狂句を詠まるゝを苦にしない、なぜならば、氏の場合に於てはやむにやまれぬ熾烈な感動が、放奔に突き進む赤裸な人間性の本然的創造と解し得らるゝからである、氏の純眞な面目はそういふ感情的な若干の英雄趣味にあると思ふ、時事吟の殆んどが英雄趣味的立場から批判したもの許りで、報知新聞などに毎日連掲するものなどは全然異なるのでわからう常に口にさるる長州の血といふ事も風雲に乘じた英雄主義の憧憬の表白である、此點から氏をプロ川柳家とはみたくない、ナゼか後述する。

敢てこれは劍花坊氏許りではない、「蛭子は後輩だから相手にせぬ」などゝ、己れをのみ高しとするは老人の癖で、柳壇での最年長者がこんな事を公言して得意になつてゐるなら、全体川柳家の何人に論議を闘はすつもりなのか、これは卑屈な毫碎的英雄主義の災禍である。

筆を返して『川柳人』誌を見ると＝又氏の著書をみると＝凡そ遂號言葉は違つても同じ意味で、『僕の投げた一石がはからずも幾重の波紋を生じ新川柳の誕生となつた』といふ、アノ昔々物語の英雄的新川柳元祖爭ひの繰言がある、或は『今日、日本には何萬人といふ川柳作者がある、が概ね所謂既成川柳なる者で、其他新興川柳或は生命派といふ新傾向かある、僕が興亡當時の意氣を中途で有閑藝術に妥協した罪がかういふ結果を來したものと忸怩に堪へない』などは、氏のハンドルの取方に因て柳壇か興亡するかの如き小的態度は、確かに小英雄性優越意識で、此の固定化した支配觀念を根底から除去する事なしには、群盲初心者を驚かす手品の種にこそはなれ、衆多を同一線上にながめる懐しい、近代的人間味の大衆詩精神の母體とは成り得ないのである。

レーニンのこの純朴さと氣取らなさこそは人中で眼立ないやうに

若くは少くとも如何な場合にも自己を押ッ冠ぶせたり自己の高い地位を強調したりすることのないやうにするこの用意こそはレーニンの最長所の一面であり新しき大衆の即ち人類の最下層のドン底の單純なそして普通な大衆の新しき指導者の一特徴であることを悟るに至つた（スターリンの言）

人間レーニンとプロ川柳家劍花坊氏との對照に於て、所詮氏は英雄主義であると斷定する。それでもよい川柳の一角は、

繪畫堂にいつ迄膝をくじり居る　劍

の詩味があつてよい、劍花坊型の劍花調があつて好い、只氏が祭上げらるゝ爲めのプロ川柳なるものは、閑仕事？樂屋落？雜誌經營の一打開策と見做されよう、八面玲瓏なプロ川柳は體驗再生の所産でなくてはならぬ、空想や理論や安直な同情の押賣ではない、プロ階級の惱みに直面した犧牲精神の覺醒的奮鬪からのみ滲み出る、腹の底からの絶叫でなくてはならぬ、私は

麗かさ新聞を折る土の上　劍

と云ふやうな東洋藝術の觀照に生きる氏の作品のみを樂しみ度い。

どん慾のつむじに渦毛赤く燃ゆ
のこる戀ゲーテ七十花の春

なぞには觸れないやうにしよう。

二本ある手を二本ともふところ手　劍

此の句かブルジョアを笑殺したものであるか否やは別問題として、ドコかに劍花坊口吻の宿るを知るのである機智的こいふよりは劍花坊的輕妙な作だと首肯せしめる、だからか、やたらに換骨脫體をした眞似手が多い。自選句集にいくつもある。

斯く私が無遠慮に言ひたい事を筆にする＝安川氏なぞも＝そこに氏の大人性があつて　昭和五年柳壇の莊嚴な存在でもある

私共が一切言及しない老いたる人々は一九三〇年の問題からは過去のものなのである、そうではないか。

×　×

自選句集の八十錢は安すい、欽賞に値ひする、よし一頁幾何の志納金は微したものでも、他の嫌ひ難ひ出版上の勞苦のあつた事は感謝に堪えぬ、若したつて慾をいふなら、九十九錢として裝釘の工夫である、汚損し易い、結局一般的に賣れる本ではなく、內輪同志の書架に限定版たる滿足を誇るものである、白石氏の校正であらうがお骨折りで句集の責任はそこに存ずる、尤も誤植が全然ないのではない。

紛裝に人の姿を借らんとや　（一六七頁）
陰欝を知りぬ子子なごやかに　（一七三頁）
莫然と土に親しむ二十七　（一三六頁）

等一寸目に止どまつたもので、扮裝、子子、漠然が正しくはなからうか、ゲッキョウがゲッゲッとは常に誤り易い、聖人內修其本、而不分飾其末、漠然無爲、而無不爲也で、ぼんやりして明るく土に親しむ青年は尊い。

私の書架に句集の一冊が殖えた悅びを有する。

南海新聞柳壇

南海沿線の句　朝陽選

天、地、人、入賞の句に全線一往復乘車券進呈

投句先　大阪府高石町南九九九　太田朝陽宛

前列向つて右より　櫻井圓角・福田飛佐志・麻生路郎・小杉曹一　後列右より　岡野順三郎・生田
翠夢・吉武六二郎の諸氏（五月四日日本ラインを下りて白帝城及夕暮富士をバックとして撮影）

旅より◇◇◇

日本ラインを下る

路郎

五色岩附近

美しいこゝろをのせて下るなり

勝山附近

帆をあげりや眞雲の風の匂ふこと

敵隧岩附近

君を思へばラインは長し流れは強し

白帝城を臨みて

みんな來いこゝらで寫眞うつしごこ

白帝城にて

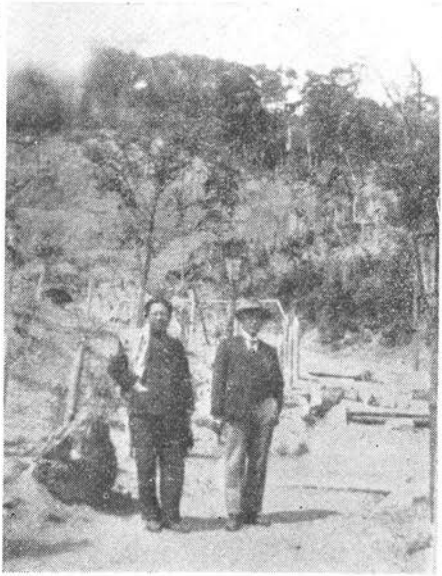
間道は木曾の流れの音斗り

行吟　宇治川ライン

煙と塵の大阪から新緑の宇治へと急行のローマンスカーが天滿橋を後にしたのは四月二十七日午前九時過であつた。此の日淀の競馬の最終日、一

ト儲けせんとやがて取られるのも 知らず乘合せたフアン達の 勝馬豫想の沈痛な顏よりも我等一行の賑やかな騷がしさは その人達から羨まれる感があつた。

宇治まで先廻りをされた山雨樓氏が一行をここで迎へてくれられた。やがて平等院鳳凰堂浮島十三塔與聖寺等の征服、それだけでも都會忘却の滿喫だ。昨年の川柳雜誌五月號の表紙畫柴舟氏の新綠の與聖寺の景を參照するのも愉快だつた。美しい流れ山峽を縫ふ樣に行く途すがら、白つぽいうす櫻山つゝじ霧島山吹の花等清楚な山と流れに更に情感をそへ堰堤までの徒歩二時間、里十九君の弱つた〳〵の聲を聞く。晝食後滿々たる青碧の水を溯るモータボートが輕快なエンヂンの音を殘して去り出した。ワイシヤツ姿で元氣旺盛な萬よし老を露斗亂耽の兩君が、ふと河畔の右山間に見つけ合圖の社旗を打ち振ると、これに答へて帽を振るのが見える。船はそのまゝ疾驅する。さう〳〵見失つてしまつた。外畑まで約三十分南郷まで七十町の間に鹿とび米かし等天然物があり、足弱の連中はこそ〳〵自動車で先へ行くに反し子供等の方が元氣だつた。瀨田川の大洗堰南郷よりは太湖氣船で立水丸によつた。案じてゐた萬よし老も揃ひ



向つて右が安井ひろし氏・左が伊藤愚陀氏・昭和五年四月十七日近江八幡公園にて若井たけし氏撮影

船は石山寺を經由してぼか〳〵とした暖かいその日射を背に浴びながら瀨田の唐橋の下を通り湖岸濱大津へと向ふ。船中かほる君の白井櫨八里十九君の長兵衛で鈴ヶ森の一幕が演ぜられた。乘客一同大喝采。ボーイの物賣も商賣を忘れて興がつてゐた鐘紡爭議の同情金を集める爲めでも何でもない萬よし老の勞働演說や例の銚釐りに二合瓶は運ばれる。その興味の深甚さに疲れすつかり忘れてしまつた。大津で下船した一行は京都へ出て一路大阪で飲む相談が出來てゐた。當日の參會者は路耶主幹、萬よし、山雨樓、亂耽、かはる、里十九、旦洲露斗、トシオ、綠雨、同夫人、新水、子供三名以上十五人であつた。(新水記)

○ 山雨樓

宇治橋で待てばのん〳〵流れてる
新綠へ酒の氣焰は吸ひとられ
宇治川を上りつめると涼み船
胸つき六丁立木觀音
一行が汽船の春を引き立たせ
萬よしに逢ふて肩身が廣うなり
高い學資をボートの選手
比良を眺めて鹽で通ふ物語
八景の一つ二つへ手が屆き

○ 亂耽

單線のきはまるところ春の水
鐘も寺も見た事にしてピクニック
新綠はよし水の色酒の色

山宣の屋敷大きく水青し　旦州

○

競馬版俺には買えと云はぬなり
辨當を食ひかけて起つ舟が着き
疲れかくして子供勵まし
誰を怨まん呑めぬさびしさ

○　敏夫

万よし老湖上に酒を呼んで
政治は數字ですと四十三錢二合壜

名所史蹟　**句行脚**　琴人

奈良にて（四月二十日）

案内者のやけた羽織の後へつき
花の松地使はたゞのやう使ひ
若夫婦鹿も承知でつきまとひ
三笠山知つてゐるのは下で呑み
三笠山こけて氣のつく鹿の糞
醉つた目に良辨杉が逆に見へ
手向山歌留多にあると子が敎へ
大佛へ首のつけねがだるうなり
寶物の初めの方は忘れて出

和洲秋篠寺にて（四月二十一日）

附近に往時を偲ぶ

官女達こゝらまで來ておゝしんど
采女達内裏の噂してもぐり
御代參菖蒲が池が目あてなり
其後の采女菖蒲が池へ來る
秋篠はついでのやうに官女達
薄墨の御綸旨を拜す
御式徴の綸旨は紙も薄手にて

寶物拜觀

着古した姿でお在す御佛
寶物に缺けた瓦もならんだり
三十二相殊に御目のうるはしく
十二神取つて喰はんとするもあり
禿げちよろけたのがまちつこで國寶

本尊佛大元帥明王

一丈の御たけにまなこらん〳〵と

唐招提寺と藥師寺（四月二十二日）

唐招寺破ら家といふさまでゐる
千貫と聞けば重たい如來樣
藥師寺の塔が霞んで音もなし

橿原宮にて（四月二十日）

玉砂利へシャッキリとなりこけかゝり
商賣の奸手段に乘る
集団帖僞物が交り腹がたち
訴へりや平氣で警守長閑なり

長谷寺にて（四月二十三日）

觀音の驗は泊つてからのこと
石明がまだかくれてる長谷の寺
女菩薩と拜んだ目には大きすぎ
山寺へ白粉の香か花の香か

神戸楠公社にて（四月十九日）

噫嗚忠臣の墓は借地のやうにゐる
楠公の西門からは馴れた道

三八

島めぐり（琵琶湖）　鮎美

黄昏れて船のはやさに水光る
旗ふれば多景島の人旗をふり
一羽二羽三羽四羽五羽沖の白石

週刊朝日　**懸賞文藝（川柳）**

題「踊」　麻生路郎選

秀逸（三名賞金贈呈）

岡山　中山爲子

一本になつたは春の踊から

評　繊細な女性―涙ではじまつた彼女の生活にも春が來たのではあるが、それこそ嵐の前の歡樂に等しいのかも知れない。

上海　小川和枝

セーラーの肩にゞかぬダンサーの手

評　赭顔巨軀、濤のジャイアントを想はすセーラーと、紅玉の美はしさに躍るステップガールとの對照。咲くは戀の華か、流れか。

和歌山　鈴木文一郎

筵から踊りあまつて泥がつき

評　花爛漫、人絢爛の春。都會の憂鬱は郊外へ郊外へと氾濫する。

他佳作（五十名記念品贈呈）

一路集

（募集句）

森東魚選

耳

眠る兒の耳たぶの赤さはもたけし　柳翠
書休み大工は釘で耳を搔き成馬　人
妻の愚痴もう狎れ切つた耳に成り山茶花　鐵洲
耳垢を搔く門衛に花が散り草石　紀平
米粒の載る耳たぶをうれしがり湖山　佳水
バスガールの耳の埃を考へる一水　秋
二次會は耳打ち丈けで良く解り武藏坊　豆
廟下から幹事の耳を借りに來る突支坊　幻草
聽耳を立てれば風の音ばかり菊路　虛白
無雜作に兎釣り下げられて來る言絃堂　勝二
醉ひ覺めの立てば耳から土が落ち市公　兒
サイエンスの外は聞こえ耳を持ち圓角　柳
宮角力取つた老人耳を見せ四五磨　蘿
聞き直す耳から先へ向いて來る山抱子　楓
五錢玉耳へはさんで風呂へ來る正坊　露
はづかしくも障子一重に耳をよせ枯骨　斗
蠅が又止つたらしい馬の耳柳翠　紫
易者その大きな耳を見逃さず裸人　光
ナンセンス耳輪もゆれて只嬉し鐵洲　桂
カーテンを潜れば耳の筆が落ち紀平　枝
耳にふたをして村一番の長者佳水　樂
熱い耳して兄さんこいふに逢ひ秋　之
耳までを染めた話を聞きたがり豆　雨
御隱居は達者な耳を憎まれる幻草　吉
いさかひを壁に聞いてる面白さ虛白　祥
耳の筆取つて受付きゝに立ち勝二
猫の耳時々動き風の音兒
戀すてふ耳にうれしい事ばかり柳
レシーバーはずした耳へ跡があり蘿
鉛筆を耳に鋸持ち替へる楓
狂ひましたかと時計屋耳へやり露
全快に耳新しい事ばかり斗

杭全町 MEMO

綠雨

▲主幹路郎先生と社友櫻井圓角、生田翠夢の他の諸氏とが五月四日日本ラインへ旅行せられました「美しいこゝろをのせて下るなり」路郎。

▲編輯局安井ひろし君は五月九日伊勢へ旅行せられました。

▲同人福田山雨樓君は四月廿二日有馬溫泉から久し振りで都會の俗塵を洗ふ氣持はえも云はれませぬと言ふ通知を出して皆をうらやましてゐます、句に「川柳を忘れかれつゝ山の宿」

▲同人水谷鮎美君は四月廿九日卜居君と琵琶湖島めぐりをされゝた。竹生島からの句に「山門は近く線香匂ふなり」

▲社友白井梅里君は三洲豐川閣本殿落慶開帳を機として、豐橋川柳大會を四月三日豐橋商工會議所で催されました。

▲川村觀月君　十日華燭の典を擧げられま

よい便り有るにして置く耳を碧　水
耳立てゝ聞けば隣も借があり　英賀夫
耳朶をいぢる課長に日が永し　空山
耳打ちへ女將心得顔で立ち　喜天
耳を何遍押へたか新家庭　多郎
耳打ちを見れば不氣味な薄笑ひ　鯉友
目も耳もたつしやで老婆にくまれ　一柳
耳遠く靜けさに母一人居る　耕民
それらしい話に娘耳を立て　今雨
はゝきりとつんぼ惡口聞いて去に　双車
さりげなく云へど激した耳の色　青水
耳に陽赤き花のトンネル　黒天子
耳許で何か言つてる女給笑み　松露
耳よりな話ラヂオを止めに立ち　飛幸
秀吉は耳ばかり見る勝いくさ　同
幼稚園耳うちされて聞きわける　四方路
取込んで居る母の耳又借られ　同
又元の靜かさとなる耳を立て　紫石
耳掃除床屋手術の型となり　同

手

柏手の一ッ〳〵に老ける母　英賀夫
天下太平手を上げて居る鐵洲　憲坊
友を呼ぶ手に圓タクが寄つて來る　紀平
めり込んだ樣に指輪のきれいな手　山茶花
萬歳へ上げぬ片つ方何かさけ　桂舟
夏の日を義手手袋のまゝで居る　桂舟
水たまり越へて仲よくマタつなぐ　喜天
油手を洗ふスキ子へ別な用　一柳
手まり唄數へる母も子にかへり　桂舟
佛壇に今日を感謝の手を合せ　青水
耳掃除なとしてかまそ暖かき　不然
病人の耳の近さが氣にかゝり　成馬
ふと戀人の耳を眺める　たけし
耳打ちへマネキンなれた顔で居る　朝雨
(軸)トンネルと云ふ耳を持つ一と盛り　東魚

中野柳陽選

手の音がした瞬間を蚊の命　朝雨
スゴロクへ賽まく父の大きな手　裸人
手を叩く度に露店の値が下り　吉祥
手品師は何んに持たぬ手を見せる　飛幸
さまゞ〳〵の手が寄つて來る改札口　菊路
うつかりと手も上げられぬ堺筋　益次郎
柏手に晴れ〳〵とする我をみる　耕民
仕事着を脱ぐと汚れた手が目立ち　柳兒
先生の目にちと擧り足りない手　同
今治水兩方の手に頰を抱き　空山

した。

▲小鐵千鳥君は四月廿日高岡千代子さんと結婚せられ高岡姓になられました。句に「わが家と思ふ氣持の拭掃除」

▲北國新聞社の窪田銀波樓(本社客員)は今秋金澤柳壇の錚々たる、めかく子、銀砂子、紅の花・柳二郎の諸氏と共に來阪されることになつてゐます。本社では日程の決定次第歡迎川柳會を催すことになつてゐます。

▲社友上田柳影君は、四月十九日岡山から高松方面へ旅行せられました。

▲舊社友島田翠峰君は五月四日笠置行在所に登山せられました。

▲河野双車君は四月廿日から一週間天の橋立方面へ旅行せられました。

▲藤岡旦洲君は四月廿日二見ヶ浦から繪葉書を寄せられました。

▲本社客員西原柳雨翁が四月廿七日長逝せられました哀悼の意を表します。

▲社友中野柳陽君(滿洲)の母堂四月廿六日夜鄉里にて死去されたそうです、異鄉にあつて母堂の訃に接しられた心情を思ふと同情に耐へません「故鄉の山河白けて母の死を聞く」の句を寄せられました哀悼の意を表します

▲詫間三猿堂君の嚴父四月廿八日午前四時

綱渡り翼の樣に手をひろげ　同
萬歳の双手は天を破るよう　青柿
拭き掃除しますと舞ふ手を見せる　紫石
柏手する間を解説の取る湯呑み　同
失業のしなやかになる手をみつめ　蚊郎
皺の手を握つて金に投げキッス　四五磨
手まねきの一つへ車夫と運轉手　篤男
子守もう手垢氣にする年になり　虚白
不治だとも云へず代診手を洗ひ　稔
口答へする編物の手が慄へ　同
大石は手の鳴る方へ醉ふて居る　十戒
尋常科習字の有つた手で歸り　同
啞へ手眞似の口も動かし　同
香奠へ手の切れそうなのを包み　十戒
振り上げた手へ分別の血が流れ　市公
握る手へ握り返した程の戀　太路

柱

緑之助選

○地震から柱時計の後れがち　紫石
床柱よいつまで生きるたけし　同
ネクタイに柱鏡の朝となり　勝人
床柱負ふて仲人座るなり　松坊
神門の柱叩いて見上げられ　蚊郎
柱から見る南京虫に火が灯り　湖山
柱掛けこれだけ歪む巾を見せ　太路
手から手へ渡る銀貨の行きどころ　新水
マタばんをつかみ損じた二本の手　双車
拍手に願ひもなくて御辭儀丈け　登美坊
扱け出す手足吾が家のせまくとも　武郎
生甲斐を見つけ鍬の柄握りしめ　吉紘堂
神殿の奥へ柏手しみ込ませ　幻草
尊さは無口の父の手の堅さ　英賀夫
義手の肩そびへてうすら寒い春　鐵洲
一擧手に力のこもる劣等兒　鯉友
人間の手になる機械手を彈き　同

追加　吟

佛書たゞ手垢に道の遠くして　柳陽
手洗の底から心のぞかれる　同
悲しくは手品の種を明かされる　同
（舊作）合承をほどけば右と左の手　同

伊藤緑之助
安西杏三　共選

獨り者らしい柱の美人の繪　志洋
御隱居の自慢は床の柱なり　桂舟
柱から幼い記憶ふと見つけ　篤男
勤儉の二字が柱に見えるだけ　新水
柱から柱へボンの歩き初め　雨町
先代も凝つたと見える床柱　四方路
落書の柱へ叱られたことなど　太路
須彌壇の燈が映つてる大柱　一柳

死去され、本葬は山口縣岩國町で營まれたそうです、哀悼の意を表します。

▲同人福田山雨樓君は八十六歳の祖母が五月九日夜鄉里で永眠されましたので歸國されました、哀悼の意を表します。

▲社友安西杏三君は病氣で欠勤されてゐられます、一日も早く全快を祈ります。

▲尾崎海洋人君は寢込んでゐられるそうです、一日も早く全快を祈ります。

▲石川縣小松町の大火罹災者へ見舞金を編輯局で募り應募された人々は路郎先生、萬よし、學人、三笑、ひろし、新水、山雨樓、亂耽、鮎美、素人、雨町の諸君と私であります。

▲私は四月十九日午后二時十分大阪發の列車で鄉里へ行く途中北陸線大聖寺驛にて下車、同所で大聖寺の川柳家亂雨氏外三名に出迎へられそのまゝ別れて山中溫泉で一泊、翌廿日金澤川柳大會に出席、金澤ホテルで一泊廿一日聖寺町の聖城川柳社の川柳會に出席しました。特に小生のため歡迎宴まで開いて下されたこと厚くお禮申述ます、同夜終列車で歸阪しました。

▲本號の編輯は路郎先生、ひろし、學人、亂耽

ふと柱にもたれてみたい雨が降り　英賀夫
電柱の張紙今日は新しい　紫光
ほろ酔ひの頬へ柱の冷たさよ　勝二
電柱の片側濡れて通り雨　清路
破産するとも知らず柱が光り　みや子
無雑作に大工柱へ釘を打ち　今雨
床柱観世流をば聴きあきる　露斗
住み慣れた柱手入の艶を見せ　成馬
兎もかくも讀んでうなづく柱掛け　幻草
見送つた柱に凭れ月を見る　豆秋
泣かないでね柱がへこんだ〳〵　巨柿
ころがしてあれば電柱長いなり　吉絃堂
帆柱へ戀の港を伸び上り　同

五　客

病んだ目に柱の節の動きそう　裸人
死んだ子の殘したる疵のある柱　樹光
三代を磨き上げたる床柱　光穂
霜柱朝の散歩の跡があり　紫光
待たされて待たされて柱にもたれる　武藏坊

秀　逸

淺ましい心柱にもたれる　新水
都へ行かうか知ら電柱が鳴る　たけし
地下室の柱のやうに默つところ　豆秋

○　杏　三　選

すねた子を母柱からもいで來る　紫石
こゝがいゝなぞゝ柱の前に座し　圓角
柱から柱へ大工の符牒なり　喜天
やるせない想ひ柱に娘はもたれ　雨町
空いてゐるつもりが柱の陰に來る　八歩
應揚に腮でもの云ふ床柱　突支坊
くやしさのあまりを柱へ持つて行き　吉祥
出戻りて家の柱に親しめず　たけし
帆柱へ戀の港を伸び上り　吉弦堂
柱だけ立てゝ普請場陽氣なり　枯骨
まこまらぬ頭柱へ持つてゆき　英郎
山塞の柱に殘る緋のしごき　勝二
火柱へポンプ無能なやうに見え　碧水
棟上げは柱ばかりの中に立ち　一柳
帆柱は林の如く今日の荒れ　紫光
奈良へ來て柱の穴を抜けて見る　紅
國寶の柱まつすぐひゞがあり　幻草
日あたりへ柱の影がはすにのび　露斗

佳　調

電柱へ春風ゆるうゝならせる　太路
廻廊の柱各々影を持ち　蘿楓
電柱の片側ぬたれ通り雨　清路
淺ましい心柱にもたれてる　新水
茶柱に心持よく朝を出る　市公
自習室この柱から僕の分　四公路
電柱の工夫に唄がまたこぎれ　鐵洲
人建前の柱の中でみんな酔ひ　柳兒
(地)道順に電信柱も入れて云ひ　武藏坊
(天)床柱貝ふた代理の肩のこり　双車

町二、雨町、公二、柳影の諸君と私とで致しました。

新誌友

（五年五月十一日まで）

「川柳雑誌」前金半年分壹圓八十錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勸誘下されて樣御願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雑誌」の近刊を見本として差上げますからお申込下さい。（綠雨）

内村樹光、紀平凉哉、道田嘉三郎　山田烏莊（竹内多聞）山下三郎（長谷川一徹）中野滿隆（長崎柳秀）前田吉太郎（住田亂耽）小松原巖（出口雨町）藤井勇美（松丘町二）山路信、古門康雄（橋本綠雨）石曾根民郎　鈴木志洋、大山露斗、平岩司郎、後藤清（本社事務所）

轉　居

伊藤愚陀君は大阪市西成區仁右門町五〇八上へ　▲中見光路君は大阪市西成區粉濱西之町三ノ三　▲池田雪峰君は大阪市東區玉造日の出通背尾英三方へ　▲川村觀月君は大阪市西淀川區大和田町六三四壺坂方　▲高岡千鳥君は神戸市兵庫富屋町四二へ

句の獨創力

安川久流美

◇

毎月餘り眼を通さない『川柳塔』に珍らしく五月號は一句も殘さず作句を咀嚼しました　その結果私は左の五句に獨創的の力がこもつてゐるのを見出したやうです。

ポケットへ兩手を入れてい巡査　かほる
春の海マッチをすれば消ゆるなり　同
日曜日ごこかで釘の音がする　素人
貧しくも春の娘に出來上り　新水
お丶青空よ仕事がないのに　豆秋

斷つて置くが之等の佳吟は『巡査』『春の海』『日曜日』『娘』『職』などの題を課されて作句を強いられたら屹度生れる句のものじやない。巡査といふ月並の人事に對して輕く平淡に有のまゝを叙し、春の海の俳季題に春風を咏まず柳化した點日曜日の陳腐文字を釘の音に活かせた所春の娘と思ひきつた修辭法、詩にならんとする青空、自然の動くこころへ巧に人事を取り入れて餘情句を吐いた點孰れも非凡の作句として推賞するものである。

これに反し課題吟の模倣は何萬句讀んでも句の人間的價値を見出されぬ私です。

（四月二十五日）

四錢で道後の湯に浸るの記

—附七圓を儲けて歸つた話—

三好革郎

此間松山支部の一周年記念大會に列席するために、ひろし、亂耽の兩君と道後へ行つた時の記事と句は前々號及び前號に掲載されてある。だが僕自身が嚢中僅か四錢の錢〻か持つて居なかつたといふことは　恐らくは同行のひろし、亂耽の兩君も御存じあるまい、隱して置けばよいのだが、秘密といふものはともすれば喋りたくなる。それが僕に此の記事を書かせたのだ。

ひろしといふ男は何だか知らないが虫が好く、女房を死なした後で淋しがり屋が、一層淋しさうにしてゐる。氣の毒で可哀さうで仕方がない、欣女追悼句會の

歸りに、琴人と一諸にひろしを訪ふて萬よしと四人で呑んだ萬よしは先へ歸る、僕と琴人が歸らうとすると靈前の燈明がバッタリ消へた。

氣になつたが、その儘歸りかけると、送つて來たひろしが、門の所で溝の中へ落ちて、左の向ふ脛にスリ傷を作つた。こうなると一人で放つて歸る譯には行かない、結局僕が泊つて、傷の手當をしてやる事になつた。

朝寢坊のひろしの御つきあひをしてゐると朝飯が濟んだのが十一時頃だ、ひろしは旅費は僕が立替へるから一緒に道後へ行かうといふ、素人にも長らく會はない、聲が出ないといふが、ごんなに惡いか、見舞つてもやりたい氣もする、それにひろしが馬鹿に淋しがるので、ぢや行かうといふことになつて了つた。

然し少し位の小使は持つて行かなければならぬと思づたので、家へ歸ると鍵が頑丈にかゝつてゐて入れない、泥棒の用心にはよいが、いつも締め出しを喰つては閉口してゐる女房が里歸りをしてゐるので、留守居の先生昨夜僕が歸らなかつたので、何處かへ遊びに行つたのだらうと思ふが、何處へ行つたか、一寸見當がつかない。四時過ぎまで待つたが歸つて來ない、それで仕方なしに會社へ出て仕事を濟ましたのが八時過ぎ着の身着の儘で、オンリー四錢を握つてひろしの所へ行くと、途中で亂耽とひろしに會ひ　圓タクを一圓に値切つて築港へ飛ばすお恥しい次第だが　煙草錢にさへ困ると云ふ始末、幸ひにして亂耽が店（亂耽君の家では副業に煙草店を出してゐる）から持つて來た朝日を出してくれたので助かる。此の時ほど亂耽に感謝したことはない。それからは呑んで管を捲いて、松山の川柳家を驚かせたぎり、道後の湯にも二度這入つただけで、ひろし君の樣に欲張つて四度も入らなかつたのは、入りたくても湯錢かなかつた爲めと今一つは足が無いのを人に見られるのがイヤだからであつた。

カナメ喫茶店

心ブラにお出での節は是非お立寄を

緊縮時代に最も適合した

カナメ喫茶店へ

柳人は特に歡迎いたします。

南區疊屋町周防町
東入南側

カナメ喫茶店

柳人

永田里十九經營

この僕が歸りには大枚七圓の金を持つて歸つて來た。これは流石物に驚かぬひろしも亂耽も吃驚してゐた。これは松山の諸君に報告をして置かねばならぬ義務があると思ふ。

歸りの汽船は紅丸、船中で旅行記を書き、「禮狀」を書いてのんびりすると、酒が欲しくなる。早速麥酒だ、實は道後で素人と別れを惜しんでギリ〳〵まで呑んでゐた酒がまだ多少殘つてゐる。そこへ麥酒が入つたので、實に愉快になつて來たボーイを呼んで一緒に呑む。ひろしや亂耽の樣な貴族にはボーイに管を捲くといふ藝當は出來ない、我輩ボーイと共鳴して盛んにメートルをあげてゐると此のボーイは東新を買つて損をしてゐるといふ、株のことなら、門前の小僧習はぬ經を讀むで多少は知つてゐる。そこで麥酒の勢ひをかりて株の講釋をやるとボーイ先生スッカリ感心して了ひ僕の言ふ通りにするといふから一寸困つた、だが今更ら逃げ出す譯にも行かない、いゝ加減に管を切り上げて、寢室へ歸ると、ボーイ先生御禮心で毛布を山の樣に抱へて來てかけてくれたので熱がりのひろし君が先づ悲鳴をあげる。翌朝天保山に汽船がつくとボーイ君僕の社で發行してゐる株式通信を是非送つて貰ひたいと言ふので普通は月十圓の通信料金を七圓にまけて置くといふと五十錢銀貨を七圓持つて來てよろしく御願ひしますといふ。そこで僕が七圓の金を握つて大阪の土地を踏んだ譯で。

四錢握つて道後や松山で不景氣な話を聞かされてゐた時とはまるで違つた氣持で自動車の中に納まつたことは言ふまでもない、人間矢張り金は無いよりある方がよいといふことは泌々さとつた。之れが自分の金であらうと他人の金であらうと、金を持つといふことだけで人間を愉快にさせる。

川柳家諸君よ、不景氣で困るなら一度道後へ行くべし、道後の湯は軀に効くだけでなく、僕の樣に金儲けをさせてくれることを保する

くわうふう的な湯氣

若井たけし

ラヽラも覺えた。端唄も嚙ぢつた。昨今の緣談にさへ兩腕のプルスも、もう平穩である。

終ひ風呂の鈍いウエイヴに冷たくキッスされながら、やがて來るであらう日への蒼白い僕のイマヂネーションは、いと・・・・・・・もくわうふう的な湯氣の動搖のなかに、ことぎれて行く。

モルフイネ挿話

平井蒼太

廣々とうそ寒い八疊の部屋に、私は女と差向ひに炬燵に膝を入れて、涙交りの訴へを聞いてゐた。

『ほんまにあの時、モルフイネと饂飩

粉こすり替へて置かなんだら　今頃たつちやんはごないなつてますやろ、ほんまに直感て、自分にも分らない　恐しいもんやわ』

彼女こたつ子は、都會へ職業を求めて國を出てから、決して離れない友人に結び付けられてゐた。私の頼まれてゐた母性こ云ふ雜誌社…今はない…の募集に應じて、三十何人の女に交つて二人は來たのだつたが、結局たつ子一人が採用された。經濟的基礎の薄弱な[illegible]の内容を知つてゐる私の目に、生活戰線に躍り出して來る女性の悲壯な姿は、寧ろ痛ましく胸を打つた。

そうして、誇大妄想的不良紳士にしか過ぎない社長の犧牲の血祭に擧げられたたつ子は一度與へた最後のものゝ爲めに金策の申出を拒絶し得なくて、一人四國の小さい町に醫師を營む生家への、生れて始めて容れられないであらう過重な要求を願ひ出る可く、心細い旅立をしたのだつた。其晩、出郷以來貞操保護の爲め肌身離さぬ護身藥モルフイネの致死量を友には秘かに胸に抱いて、誰にも語られぬ死の旅への決心を固めてゐたのだ。

モルフイネを抱いて船路の遙けくも、貞操か死か。廿信念も處女性を奪はれた今じは、餘りに遲いモルフイネの價値であつたけれど、而も最後の運命をあの白い粉末の微量に托そうこしてゐるのだ。

可弱い女性にしか過ぎないたつ子はでも到々自分の町に着くまで、やつこ死の手を切拔けては來たけれどぐた〳〵に疲勞した身々驛からの人力車に乘るこ共に死を飲むで終つた。そうして、死に行く身を生家の玄關へ倒した。

彼女が、毒藥こ饂飩粉こすり替へて置かなかつたならば、たつ子はそれからの陰慘な生活を、數奇な運命に弄ばれず寂光淨土に靜かに眠れたかも知れぬけれど。

饂飩粉が人を救ふこ云ふ哀れ

—三・八日—

初夏

森石竹

五月雨の降る中を彼の女を呪ひつゝ、濡れながら歩いてゐた。

ふこ手を叩きたくなる程素的な花を見た。それは造花屋の藤だ。まさに唇の房が下つてゐる。飛び込んで買おうこ思つた。横の青瓢簞に顔か書いてあつたので、驚いてふら〳〵こ店を出てしまつた。（五・五・五）

戀愛風景八題

……春から夏へ……

伊藤綠之助

A

何はさてをき春は戀せん　愚陀
めだかの戀は流れ〳〵て　鮎美
短靴の輕さも戀を知つてゐる　九葉
愛人にやがて見せんこ種を蒔き　新水

……本誌五月號より……

B

友あり近頃好みて愛誦す
春の月戀があればこ思ふなり　綠之助

C

つくれんとバイオリン彈いてゐる雨

且て相愛？の女が彼にあらざる他の男と心中した。それから二三日後のことである。

D

貴男はまだ結婚しなくつて？わたしの友達二人まで結婚したの…近頃。Y子さんは××會社のKさんへ、それからあのモガのT子さん、御存じでせう。年齢下の人と戀愛結婚しちやつたの……

たゞさびしさに書いた手紙ですよ

E

彼と彼女は夜通し花札を爭つた。朝も三人までお友達の來訪があつたが花札は休息を許されなかつた。

愛の巢のげに噴火山上の舞

F

彼女は其町のクインだと言はれてゐた。

彼女もそう思つてゐた。

彼女の周圍には戀が渦まいてゐた。

彼女もそう思つてゐた。

彼女の食慾は春と平行ではなかつた。

彼女はそれでいゝと思つてゐた。

或晩或る男が彼女を少しく嘲笑した。

彼女は腹が立つたので泣いた。

面白く戀が後押ししてくれる

G

彼は近頃スタンダアルの言葉がひどく氣に入つたらしかつた。即ち『冷い女といふものは愛さなければならない男にまだめぐりあはない女の謂である』とにかく彼は春を苦しんでゐた。

遠蛙思ひ出してはならぬ戀

H

唇がぴつたり合ふて THE END 雨町

（四、二九）

感想

尾崎海洋人

鉛筆の先きに俺の顔が黑光りを帶びて映つて居た何處からでも無く朗かな歌が流れて來たそして俺の顔が消えた。

×

耳の穴を奥へ〳〵と高下駄が通る

部屋が眞赤な熱の塊だつた。

そして俺は何んと無く腹立しかつた。

×

一枚の布團の上に坐つた、もう一枚重ねて坐つた三枚にした四枚にした五枚にした……そして自分は遂に寢轉んでしまつた。

×

雨が降つた。

そして止んだ。

次に日が照つた。

自分は交叉點を向ひ側へ渡つた。

×

左の掌へソット筆の先きで顔を畫いた

何んだか泣いて居る樣だつた。

右の掌へ畫いて見た。

其れは微笑んでる樣だつた。

×

咽喉佛が驚いて飛上つたそして……

澁味のある藥がヅル〳〵と尾を引いて通つた、それは人生の中の些細な事に過ぎなかつたのだ。

遊び仲間を集めて來て村の後の山に楢の實を採りにゆく、そして竹串を通して出來上つたのをごんぐりのバイと名附けて盛んに廻して遊んだものである此のごんぐりのバイとはんしよごまとは大人が死ぬまで忘れられない子供時代の追憶そのものであると思ふ。はんしよごまのひゞきをひゞかせるものに消防のポンプの警笛かある。モダーン汽關車の汽笛かある工場のサイレンがある自轉車のハンドルでうなるやつがある。が、この緣日の善男善女、大人、子供の人波を縫つて何處としもなく響くはんしよごまのゝごけさにしくものは近代文明の產み出した音波の中には見當らない。

子供が父親の肩車に乘つてふわり〳〵と空に浮かべるゴム風船　それ等に滿足の出來ない一人歩きの鼻たれ子供は、きつと父親か母親の袖を引つ張つてはんしよごまを買へとねだるこの男性的なうなりは日本男兒の意氣を高ぶらせるからで

ルービヒサア
ソパの体液
活力の源泉

に桐の蓋をほゞこし、上蓋には丹青の渦卷形の繪を色ごり、竹の筒の遍壁に二所程穴をうがち、中心に竹の軸を通したもので緒を以て廻すと實にほがらかなしぶ味のあるうなりを立てる。

楢の實の青く熟する九月の半頃近所の

朝を一枚めくつたら晝が出て來た。晝を一枚めくつたら夜が出て來た。更に夜をめくつたそして俺はソツト覗き込んだ。其所には枯風の吹く冬が泣いて居た。

×

外燈がポツカリ闇に浮いて魂の樣だ。大きな建物が泣いて居る。

ショウウインドウのナイフが死ねと云ふのか知ら？自分は淋しくなつてしまつた

—五月三日夜句會より歸りて十二時半—

×

はんしよごま

辰巳籬楓

緣日の人ごみの中に、ほがらかにしぶ味のあるうなりを立てゝ響き渡る、はんしよごまと云ふのがある。はんしよごまは、はんしよの響を立てる事によつて名づけられた名稱で所によつて色々と其の名を異にするが、青竹を輪切にし、兩端

あらう、このはんしよごまは何時頃日本に發明されたかはゝかり知る由もないが、此の音はたしかに武士道の精神に通づるところがあるやうに思はれる。それはあのほら貝のひびきに似て居るからであるかも知れないが。

はんしよごまのうなりよ、此の日の本の何處かの空で、せめて緣日の日だけでもほがらかなうなりを立てゝくれよ。

思ひ出

熊本　黃蛾

松井巡査部長を　大タクの自動車が轢殺した記憶はまだ新しいものである。未熟で大膽な運轉手は交通巡査や行交ふ人を案山子か枯木枯草としか思わないのか。人を人と思へば決してこんな事件は……黃蛾も去年六月廿七日平野京町の一角で無慘にも同じ會社の自動車の下敷になつた。思ひ出してもぞつとする。幸に生命には別條なかつたが、三羽博士はよくも命が助かつたと云ふ、此の事件を庄健一氏に一任二ケ月近くも炎天下を自分の事の如く會社に交渉された。四五日は全く意識が無かつたので柳友の御見舞を受けたのも記憶の限りでない。日洲君公二君共に平野の柳友と東の白む頃までも氷囊に水枕に兄弟以上に盡して呉れたと家人の言葉。此の事件以來兩君等と事情の許す限り精神的に物質的に固く握手を交すのみ。想ひ出は新しい一ケ年の想ひ出。

句會に就て

公　二

自分は句會の案内係として、貴重なるページを割愛していたゞき、聊か感想を述べて見たいと思ふ。

『ふあうす』と五月號に嶺月氏か柳誌を讀むと題した記事の一節に、番傘は句を作る點に重きを置くより句會の空氣其ものを取逃す事を恐れて居る『以下略』これに反して川柳雜誌は番傘程賑ひはないが秩序整然としてゐると云て川柳雜誌と番傘の句會を批評されてゐる。成程我社の句會は　番傘の出席者に比し、多少の隔たりがある。併しながら如何に句會盛大だとは云へ、所謂大衆的心理に依つて釀成された、つまり戯作三昧に作りッ放した句と我社の加き句會吟、卽作家各自が一句毎に個性を織り込み眞摯に作句したものとを比較した時、我等の句に對し僕は一種のプライドを感ずるものである。

或る作家は曾てこんな事を僕〻云つた『番傘の句會では容易に扱けるが、川柳雜誌の方は、非常にむづかしい』と。これは今更僕が云ふまでもなく敏感なる諸氏は何に起因するかを知つてゐられる事と思ふ。

初心の作家が作句に慣れて、日常茶飯事的な陳腐な口調や表現に倒き、自己の眞情の選出とも云ふ可き句の出來た時我が社の存在に双手を上げて贊成してくれる傾向がある。宜なる哉。例會毎に舊套を脱した尖鋭作家が多數參會されるのは當然の歸結であらうと思ふ。

横濱貿易柳壇二周年記念大會

（前列向つて右より）玉兎朗、藤生、風然、愚佛、飴ン坊、五萬石、角戀坊、風士、紅翠、斗酒、黄鳥、（第二列）白梅、懐窓、しん三、天邪鬼、紅丸、露光、貴代坊、駒人、濱の人、（第三列）潤二郎、實蝶、なみ路、右近、柳葉、壽樂人、劔城、柳桂、裕侍、省峰、不及、京之輔、去風子、松人、美水、（第四列）盈光、風の子、瀧の人、風茶、靜人の諸氏。

（三月九日撮影。六人目が貿易柳壇の選者柴田五萬石氏、高島玉兎郎氏が手にせるは川柳雜誌三月號二列八人目が本社平塚支部の酒井駒人氏です）

各地柳壇

川柳雜誌社 六厘坊忌

五月三日夜　於端之坊

天才で夭折された小島六厘坊忌を例年の通り營みました。席上主幹の追懐談に靜かに故人をしのび乍ら句作に夜の更けるのを忘れました。（柳影記）

（參會者）路郎先生、柳影、公二、海洋人、琴人、露斗、苦香瓏、柳甫、綠雨、與詩夫、四五磨、規堂、豆秋、明果、黒天子、突支坊、楚外、たけし、繁坊、英郎、鮎美、觀月、石竹、飯水、かほる、裸人、愚陀、さだを、瑞石、山月、紫明、三笑、一柳、沐天、嶺月、鵜足、雨町、鶴峯、ひろし、乱耽、

兼題　舗道　ひろし　選

舗道歩けば妻があはれな　觀月

舗道の漫歩サラリーを持ち　方眠

風呂敷を舗道にひろげ今日に生き　柳甫

舗道をまへにやきいもを賣り　露斗

舗道に笑ふ戀を戀する　愚陀

要するにペーブメントの戀なりし　たけし

舗道に春の女の影を踏む　新水

誘惑は夜の舗道のグロテスク　鮎美

自動車の後姿に舗道暮れ　亂耽

フエルトへキルクへ舗道黄昏れる　與詩夫

ゴーストップ舗道の知らぬ汗を見せ　黒天子

舗道の廣さと失業の晝　露斗

人も舗道も息をしてゐる　海洋人

澄みきつた心で舗道から別れ　公二

五月の舗道埃をさけた日傘なり　苦香瓏

タイヤーの模様が殘るアスハルト　豆秋

舗道を輕くセルの女よ　琴人

ほのぐと明けて舗道は汚されたる　規堂

眞夜中の舗道は一人歩くのさ　同
アスハルト固く若さの中にねる　柳影
葬列の舗道只いたづらに白く　同

席題　癇癪　選　かほる

癇癪をだまつて父は見てるなり　明果
癇癪の淋しくもあり四十過ぎ　鮎美
癇癪はもう友達の手を握り　観月
癇癪をよほどこらへてゐる父よ　嶺月
癇癪のトマトは食べず嫌ひなり　鮎美
癇癪のあとで小鳥へ水を遣り　鵜足
癇癪に煙草の火は消えてゐる　愚陀
癇癪をおこそまいをてけつまづき　新水
悠々と癇癪を立てさせてゐる　石竹
癇癪のなんぞ破らればおさまらず　琴人
癇癪の締めた大戸に猫の出る　三笑
癇癪の息子を叱つて釘を抜き　苦香瓏
癇癪を母が笑へば妹も　公二
癇癪へ突然すぎるジヤズバンド　柳影
癇癪の目にも夜空の美しく　同
癇癪の相手もなくて風の音　たけし
耳だけ赤く癇癪を立て　同
白い腕で癇癪を立て　かほる
(軸)癇癪でないが西瓜を落すなり

席題　時　選　紫明

腕時計うたがう程をまたされる　一柳
噴水をも一度廻る待ちぼうけ　奥詩夫
ラジオを聞き逃がした者の損　海洋人
看護もう仕盡して時を待つのみ　裸人
幼稚園そこにも時は流れてる　英郎
時に君なぞやつぱり無心なり　豆秋
朝の光りよ麻雀に疲れし眼　ひろし
春雨にいつまで戀のつゞくやら　鵜足
つとめを終へてヂヤズを歩く　石竹
吃驚しましたと二人の時が流れゆく　観月
うれしさの時計とまつたやうに見へ　鮎美
座食の身時計の音があるばかり　瑞石
座蒲團の温みへ出違ひ聞かされる　同
(五客)秒針に打勝つた氣へ發車ベル　繁坊
(同)人力車歩むにも似て春陽なる　豆秋
(同)その時は又その時を酌いでやり　露斗
(同)地下足袋はいて稼ぐ早起き　同
(同)共稼ぎ今朝目さましがぶつてゐ　明果
(人)揉め事に夜中の一時聲くなり　海洋人
(地)砂浴びたシグナルが變り　柳影
(天)朝の二時まで酒のみわくよ　紫明
(軸)眼覺しの鳴り止む迄は動かぬ氣

席題　池　琴人　選

蓮池のにごつた水に緋鯉居る　裸人
河の浮草が淋しくも見え　海洋人
禁漁の池にさかなのたよ〳〵と　四五磨
雑草に轉び池を見つめる　明果
池の鯉食へない樣な色で浮き　瑞石
池へ寄る子供を危く見て通り　新水
ゆら〳〵と池の廣さへとんぼ來る　露斗
初戀の池を廻つてから別れ　たけし
鯉跳て池の樹影が崩れてゐ　公二
物憂き日池の青さが墓はしく　柳影
神經を池へさつさと捨てゝ來る　亂耽
嬉しさの二人に池のさゞ波　紫明
山を下れば池にひるの月　ひさし
蓮の花開く音から池は明け　同
龜さんの泡なつかしく濁り池　石竹
(住)美しい蓮だ俺一人の靜の池　同
(同)町ほつゴミ捨てに來る池があり　一柳
(同)空色も寫りパラソルも寫る池　緑雨
(同)ピクニツク池の邊で食べて決め　さだを
(同)浮標だけの波に空行く雲もたし　奥詩夫
(同)池の波紋に心搖れてる　愚陀
(同)情死の池の暮れてから雨　鮎美
(同)童謡は池をまわりて暮れてゆく　同
(同)樫が葉をかざした下で菖蒲咲き　鵜足
(同)水すましすい〳〵と來て蛙鳴き　同
(同)ひろごる波紋がさびし山の池　苦香瓏
(同)藁ぐろの影はつきりと朝の池　同
(人)ホテルから見下す池の朝ぼらけ　豆秋
(地)古池の底から一つ泡が浮き　同
(天)小康の池を廻つて歸るなり　たけし
(軸)若き日へ今日も暮れてゆく池の雨　琴人

席題　肩書　互　選

博士號二つもあつて紺がすり　石竹
勳八等肩書のある仲仕なり　繁坊
肩書があつて就職難にあひ　英郎
飲むことも覺えて肩書やつとゝれ　黒天子
肩書が却つて邪魔になつてくる　さだを
肩書がある六十の釣りをして　観月
肩書がなか〳〵長い懐手　三笑
肩書を圓タクで運ぶ　海洋人
肩書が大聲で怒鳴つて居る　同
肩書を云ふなと浴衣打ちとける　豆秋
醫學博士になつて風の研究　同
肩書も出來郊外に住んゐる　かほる
肩書の一字違つて名刺出來　同
善人の肩書もあり鶏を追ひ　鮎美

資木家へ肩書のある手紙が來　同

川柳雜誌社松山支部

大島四國川柳遍路記　（松山）

地圖で見ると、伊豫から備後へ渡る飛石の樣な島がある。此飛石が中々馬鹿にならないそのかみ有名な伊豫の海賊の根據地だ。海賊と言つても只のケチな海賊ではない。清盛なんかも此海賊には一目も二目も置いて居たのである。

北條氏征伐の爲の後醍醐天皇の御與兵に拔群の功名をしたのも此島の海賊村上氏であつた。

まあ、そんな事はどうでもよろしい。さに角此飛石の中の大島へ松山の川柳家が吟行をしたのである。（素人記）

―遍路姿のいろ〳〵繪なしスケッチ―

ズラリ並んだ十人連れ、餘程人のイ、關所役人ならではまかり通さぬ、突棒、さす又組の一行。先づ花之助は大菩薩峠に一と役ある眼力の百松と云ふ顏と足、冷々子は蒙藤の張作霖、何所やらで募集の似顏に當選請合の和製奉天將軍其まゝ、素人特許品の宣傳販賣勸誘員、肩に振り分けの鞄と風呂敷、聲の出ぬのが難なれどこれも反つてよく聞いて呉れる便法あり、素泉ポストへ笠を着せた如き型營養過多のチュインガムの姿まあ一つ云へば序の口佐の脫走力士と云ふ所、松葉肩から問匰の双眼鏡を掛けて戰役將卒の碑があればキット碑文を讀み敬禮する老校長式。双葉失戀の若旦那が保養にプラツク雪駄に夏インバ色眼鏡の無いのが一寸物足らぬ有樣、其他柳町、耕路は省畧して武子夫人も敬意を表して同じく省畧…大島に寫眞屋のないのが殘念イヤ幸ひ、南無大師遍照金剛のお蔭なるべし御免〳〵（砲兵隊長五健記）（冷々子曰く砲兵隊長に御注意）

遍路吟

札所に人間らしい好き不好き　五健
接待へ地を丸出しの禮言葉　同
洋服の遍路足許あなどられ　同
氣まぐれの遍路五戒も何もなし　同

松山から省線一時間半にして今治驛下車此所は藤堂高虎が築城をした今治市で綿ネル及タオルの年額壹千萬圓以上の移出稅關支所も設けられ立派な築港を持つて居る、十人十色の輕裝に調へ海上二里向ふの大島に通ふ發動船を待ち構へてゐる。揚るは〳〵ピチ〳〵跳れてる河豚が…歸りだと之で一杯やつたらと誰やらが云ふ汽車の中でも瓢を出したが又船の中でも始まつた三十分にして三十八番蹉跎山本尊千手觀音に上陸やはりこいつはゐらい、足づり山じやない鼻づり山じやと五健が云ふ皆一寸肝を拔かれたらしかつた札挾みからお禮を出して合掌納經、

右は山左の海へ腰をのし　冷々子
眼下に伊豫の八幡渦と稱する潮を俯瞰して山の下腹を十人一列に並だ島々の間を帆船が縫ふ。

盃を乾しもせずあゝ好い眺め　冷々子

之れで辨當が少し輕くなつた番を重れて午後三時過ぎ津倉へ着いた出迎えの源氏、愛女雅女等々の先導で七時から公會堂で、お心盡しの盛大な歡迎句會が開かれた。

勞れたを忘れ句會に繪もかきて　冷々子

饗場の參拜は第二で津倉の柳人と三十三番の高龍寺にある贈正五位村上義弘の墓を訪れたのであつてもつたいない事ながら少し遠い所は遙拜で濟したものだ

義弘の碑文へ俯向く二三人　冷々子

あの峻はしい山坂を越え遠い所を態々愛女雅女のお二人が船場までお見送り下さつた御厚意を皆んなで深く感謝した（冷々子記）

日傘振る別れの陸の見ゆるまで　冷々子
樣々の遍路姿が評をされ　花之助
山續き島と思ひぬピクニック　双葉
島四國都會の人の口達者　素人
大島でお遍路さんと呼ばれたり　同

夜は津倉川柳會の歡迎句會に一同出席

△匰　島　五健選

山を越へ又谷越へて島四國　武子
島へ來て口調印象附けられる　双葉
憧れた島の一夜を物語り　松葉
島からの嫁へ姑の念がすき　素泉
島四國一夜泊つた輕い足　秋芳女
來て見れば馬鹿にならない島四國　愛女
島々へ發動船はつけてゆき　雅女
島中を一本道の幅があり　源氏
知り合ひへ船から話す島の上　同
石割りの人夫も島も景となり　素人
見下ろせば有福らしい島の村　同
（人）島へ來て島の氣分を忘れてる　素泉
（地）落ちそうな海へ出て來る島の道　源氏

（天）靜けさの島へラジオのカフエーの　冷々子
（人）渡りたい島遠足立ち止まり　雅女
（軸）山と海せわしく縫つて島四國　五健

△題　春　素人選

我庭も春とはなりぬチユーリツプ　秋芳女
春が來て遍路の笠のたなびけり　松葉
櫻鯛今日初めての赤幟り　源氏
汗ばみた素肌を通す春の風　花之助
シガーの煙に淡い春の宵　愛女
春の陽を浴びて巡禮つつがなし　双葉
行き初めの郷へ春着の花やかさ　冷々子
春の旅豫算の狂ふ事ばかり　五健
不精なを叱られてゐる春の帶　雅女
謹愼の身にはあまりに派出な春　同
ねぼけがほへ春の網引くうらゝかさ　武子
春が來て國への無心一つふへ　素泉
春が來て見すてた鉢を床へ置き　同

川柳雜誌社　**糸屋町四月例會**（大阪）

四月十九日　於テルホ新居　近藤テルホ報

△題　部屋住　互選

夜更かしに風邪をひいたる部屋住ひ　新水
部屋住ひまだカフエーへ寄るつもり　源坊
爲す事の一つ部屋住本を讀み　卯三
嫂と思想の合はぬ部屋住ひ　翠峯
はかなさは風呂の時間の戀にして　舟々
部屋住をどうともしろよ三味の音　テルホ
部屋住ひ淋しくもろた選擧權　同
部屋住へ湯になりそうな水枕　同
部屋住ひ戀はせはしやもう拾時　京郎
金が要るとは部屋住ひ思ふてず　同
夢ばかり多く部屋住み　同

△標札　テルホ選

達筆な守衛標札頼まれる　新水
妻をもらへば書かん表札　翠峯
表札で見ればいがつい人のやう　京郎
標札が突然落ちて大掃除　卯三
標札はだゝ寓とあり石疊　源坊
三味線にふと標札をふりかへり　舟々
新世帶わが標札を見て這入り　同
（軸）札をマツチで探す樣なとこ　テルホ

川柳雜誌社　加古川支部　**耽柳會例會**（兵庫）

四月五日　水田光穗報

希望、絶望

絶望希望絶望なんかしないよ虚ろな笑ひ　光穗
絶望の淵から築いた今日の地位　みや子
唇はもう死水を受けつけず　篤男
絶望が斯くも開けて來るものか　泰山
希望した仕事は何か滿されず　同
死んでゆく身に希望あり比翼塚　光穗
希望叶ふて姉さんと呼ばれる　みや子
更生のいばらの路に遲れがち　篤男
ふりあげた鍬に希望を掘りあてん　同

川柳雜誌社　**天王寺支部五月例會**（大阪）

五月九日　於　内藤製作所　須崎豆秋報

兼題　行方　琴人選

天井のすみに煙のかたまりよ　柳影
行方不明だと云ふ友に會つて來る　武藏坊
サーカスに行方の知れぬ似た娘　四五磨
大晦日行方も知れずなりにけり　柳精
雲の行方など語りし其の頃の明眸　三汀
行方が知れりや心配が又一つ　一水
食パンが堅うなる行方面白し　石竹
その行方別府と知れてあきれてる　裸人
氣がかりな灯ともし頃の子の行方　公二
投げた小石の行方見まもる　同
別々の行方へ消えるシヤボン玉　豆秋
又何所へ行くのか波の打ち返し　同
（軸）放ち鳥大輪を描いて遠く去り　琴人

席題　中折　石竹選

中折へ新聞なんか折つて入れ　四五磨
中折を兩手にのせて送り出し　豆秋
中折の色も分別盛りなり　柳影
中折をあみだに花の下を行き　公二
中折の影へ女が急いで來　琴人
中折をまつすぐ冠り息子出る　同
（軸）古い中折を給仕に渡す　石竹

席題　頸筋　琴人選

たたずんで人の頸筋ながめいる　雨宵
頸筋の白粉我を僞りし　柳影
頸筋に白さの目立つ晝の風呂　一水
頸筋を南京虫に喰われて來　裸人
ヤイトの眞上に白い頸筋　豆秋
頸筋がヒヤリとしたよ社長室　柳精
頸玉の拔ける程の戀　石竹
情熱の目をきら〳〵と頸筋へ　公二
頸筋へ冷やりと落ちた一と雫　鶴峯
（佳）頸筋が浮立つ樣な襟の色　四五磨
（佳）頸筋を少し見せてる客が居る　武藏坊
（佳）美しき頸に心もてあそび　柳影
（佳）頸筋へ傷を殘して生きのこり　公二

（佳）頸筋の毛をかき上げると　雨　石竹
（軸）頸筋へかたく抱きつく幼ない手　琴人
席題　自　慢　互　選
自慢だと思ひながらも聞くばかり　鶴峯
高かぶりでなければ聞いてやるべだ　石竹
おごる心へ蹴躓づく石　琴人
國自慢西瓜のうまい事を云ひ　四五磨
大菊を咲かして店に出して置き　同
皮肉を一つ自慢の顔へ投げてやり　武藏坊
自慢の鴉の淋しさも春　柳影
松葉杖取つて自慢を又はじめ　裸人
釣り方があるさと見せる魚籠の中　公二
級長になつたも親の自慢なり　同

川柳雜誌社
加古川支部　**耽柳會例會**（兵庫）
縣四月二十日　水田光穗報
迷、産婆
迷惑も知らずに世話を燒いてゐた　光穗
相愛は迷信なんか考へず　みや子
迷信と思はれぬ人の名も並べ　泰山
迷信を信じて母の安らけく　篤男
迷うたを知つてゐるみ深くなり　洛陽
鯉幟産婆頼もしさうに云ひ　光穗
産婆子を貰はうかと思ひ　篤男
誕生近く産婆はもう忘れられ　みや子
子の鼻が俺に似てると産婆云ひ　泰山
初産へ産婆一しよに力んでる　洛陽

川柳雜誌社　**御旅支部五月例會**（大阪）
五月六日　於カナメ喫茶店　櫻井間角報
兼題　値　段　路　耶　選
値開きをいつもお茶屋でけりをつけ　嶺雲
法外の安値にきずを探してる　飛佐志
品物を買つて値を云ふ女給なり　みつる
廉賣の値段へ仲間けちをつけ　翠夢
値も値だが物も物だと感心し　嶺雲
値段聞くなよレベルが下る　多耶
安いから悪かろうなど云ひ居れず　路烏
兼題　處　女　路　耶　選
ウエターに處女尊重の意を問はれ　習々
若ければ皆處女とも見えて居る　翠夢
その頬の明るさ處女の香も高し　圓角
あゝ處女よ敏感よ清新よ　同
處女性の危機屢々の戰線よ　靈壺
處女軍は斷然車内を壓してる　同
處女時代偶ぶには物憂し臺所　多耶
職業は處女の數にも入れられず　同
不具の子に處女と云ふ貴さもなくて　路烏
七三に結つては見たが又お下げ　同
着飾れば姉さんらしく笑ひ居る
兼題　青　空　路　耶　選
青空の樣な心と云ふ女給　みつる
青空に戀と云ふ字を書いて見る　靈壺
誕生日日本晴れを祝福し　飛佐志
うつむいて青空を見る池の釣　習々
青空の下に資本家勞働者　翠夢
野も空も青しひばりの聲がする　多耶
野に遊び青空もよしれるもよし　路烏
くにの空と思ふあたりは晴れて居る　圓角
一擧四點のボールがさぶよ青い空　同
（人）青空で四月の窓を開けて居る　みつる
（地）青空を仰ぎ社長を剖き見る　圓角
（天）青空も見ない仕事へ減給だ　同
（軸）青空に金儲けなど考へず　路耶
（軸）青空に藝者を連れた莫迦らしさ　同
席題　藥　路　耶　選
合客が歸るまで待つ婦人客　碧々
この藥自分にだけはよくもきゝ　みつる
食ふために生きる道あり胃腸藥　靈壺
それとなく藥を貯めて死を撰み　圓角
博士より藥の方が効くのです　多耶
その唇毒藥だとは知らざりし　翠夢
（人）藥瓶さげて通勤粋らしく　飛佐志
（地）お藥でもつてる樣な身体です　翠夢
（大）もう藥より修養さ〳〵　多耶
（軸）金持つて眠れる藥嚥んで居る　路耶

川柳雜誌社籔川支部
川柳たかせ會五月例會（出雲）
五月三日夜　於綠之助居　伊藤綠之助報
兼題　力　綠之助　選
微力だがと就任させてなき　利春
三〇ワットの下で妻君と指角力　巨柿
鉢卷で運ぶやんさの力こぶ　濱耶
稽古三味あまり力が入りすぎる　麗亟
手傳ふて貰ふ力に締りすぎ　同
（秀）馬鹿力兎角人から使はれる　松隱
（秀）活きたさの力五燭光の下　雷相
（秀）容れられぬ力がつゞく生活苦　同
席題　勝逃げ　雷相　選
返り討ち悠々と碁を立ち上り　松隱
勝逃げの背臈病に寒氣する　巨柿
勝逃げにさても不吉な下り蜘蛛　綠之助

(佳)勝逃げの氣になるものを忘れた　同
(同)勝逃げに寢ぐめの悪い日が續き　同
(同)勝逃けは負けてやつたを知らぬ　巨柿

席題　降りつゞき　松隱選

降り續彼等の戀にかゝはらず　綠之助
霖雨を恨んで曲馬團が着き　雷相
降り續き煙しなびた土工部屋　同

席題　茶漬　麗亟。綠之助共選

サラリーマン忙しい朝の茶漬なり　松隱
戀もなく茶漬すました春の宵　麗亟
愛の巣の茶漬おいしい湯氣が立ち　同
夜更かしが過ぎたと思ふ茶漬なり　雷相
落ち伸びて今日の茶漬が有難し　綠之助
留守番はさびし茶漬を食ひ初め　同
待たされてをれば茶漬の音だ　巨柿

席題　五月の田園　巨柿。濱郎共選

苗さばいて一服吸ひつける畦　利春
苗代に立てば夢さへ湧いて來る　綠之助
苗代の青さゆらげば香もゆらぐ　濱郎
うろたへ乍らも蛙は戀をする　麗亟
子蛙をけろりと呑んだ親蛙　松隱

席題　賣買　互選

鷄賣つて淋しい小屋の柿落葉　松隱
金で買ふた嫁だかなしも　巨柿
賣買へ兎角女房言ひすぎる　濱郎
反抗を思ひ直した買はれた身　雷相
同鄕のよしみ何にも言はず買ひ　綠之助
旅愁が深む吃りなる賣子　同

宿題　選擧　進む　綠之助選

進み出て香具師のいふまゝになり　利春
選擧から歸りの足は呑んでゐる　麗亟
氣の進む父晩酌の燗をする　同
闇の中を飛んで行つた一票　夢二
目標を見つめて進めば足がぐらつく　巨柿

川柳雜誌社　螢ケ池支部句會（大阪）

五月四日　植田湖舟報

春なかば若葉薫る中に句作三昧に入つた本社より、ひろし、雨町、愚陀、たけし、諸氏の御出席下さつた事を感謝します。

兼題　裏　雨町選

成功の過去に見にくい裏を知り　彌茶
うつかりと着た寢卷の裏を知り　同
裏口の窓から凄い稻光り　重郎
號外の裏へ註文書いて出し　錦流
舊友へちと言ひよどむ裏住居　藏六
その裏に何かありそな言葉附き　たゞし
獨身の氣樂さ裏地買ひ忘れ　可章
裏庭に小さく父の趣味があり　湖舟
(人)寄宿舍の裏へコツソリ儲けに來る　正坊
(人)病院の裏門淋し日は暮れて　同
(人)裏口へ醉ふて歸ればほえつかれ　虹雨
(地)裏長屋嫁が來たぞさみんな寄り　春流
(地)心の裏に巣喰ふ剃刀　愚陀
(天)引越した裏の廣さに鷄も飼ひ　垂郎

兼題　息子　たけし選

許嫁まであるのに息子死んでゆき　義人
息子フト今日丸刈にかつてくる　松霞
病み續く息子へ金も遠くなり　錦流
うちの息子は英語も話せます　たゞし
今更に息子のことが氣にかゝり　石松子
兩親のけんかに息子ぶいと出る　運坊
一人息子へ何をさそうか　雨町
エレベータ息子の方が先に降り　承天
默々と息子の戀を聞きしのみ　愚陀
のび〳〵と息子脊ばかり高くなり　同
(軸)帷子で息子出て行つたまゝ　たけし

席題　藥　愚陀選

藥包紙患者のメモになつて居り　六花
里の母安い藥草知らして來　同
面會に藥の味も尋ねられ　錦流
花曇りににごる水藥　たけし
藥などいらない樣な肥へかただ　義人
藥にはたよらぬ腹で飲んでゐる　穰
醫者に見はなされ藥に見はなされ　石松子
藥風呂電前に乘つて來てゐます　湖舟
役にたゝす氣で劇藥を持つて居る　運坊

席題　海　ひろし選

豫期の港へ汽船遠く着き　錦流
海に山に金さへあれば夏もよし　雨町
戀を浮べたまんま海たそがれる　愚陀
熱もなく水平線をみつめてる　たけし
漁師の夢に殺風景な波　同
小康の歩めば同じ波頭　同

川柳雜誌社　加古川支部　耽柳會例會（兵庫）

五月五日　水田光穗報

辨當、紹介

雨よ降るな辨當は出來た　みや子
母の愛辨當へつめてあり　洛陽
親方の辨當が來て晝にする　篤男
醉ひしれた工夫の腰に辨當鳴り　光穗
仲人の紹介狀で買はされる　篤男

保險屋へ知人の名刺で暇潰し　洛陽
失業は俺だけでない紹介所　みや子

川柳雜誌社　糸屋町新人會（大阪）

於　河村喫茶店　枝松規堂報

兼題　口笛　舟々選

口笛を吹いて留守番外へ出る　正二
友の來ぬ間口笛吹いて待ち　正博
聞きおぼへある口笛の通りすぎ　流星
口笛を無口な兄は振りかへり　一騎
やがて來る日を憶ふ口笛　源坊
口笛のあの家の窓に届けかし　同
（佳）嬉しさはつい口笛に出てしまい　トシオ
（佳）知らぬとこだけ口笛に成つる　同

席題　鏡　互選

高島田みつめたすがたかすんで來　耕兵
醉つた顏鏡の前で眺めて見　正二
肉体美寫しニツコリ笑つてる　トシオ
早起きの妾鏡に座つてる　莢一
鏡があつておそろしい女　赤城
念入りの化粧に鏡曇つて來　規堂
ウエター鏡の方へ笑ふなり　正博
鏡の中も妻も微笑み　源坊
大吹の兄鏡臺へうづくまり　舟々
年頃の鏡へ立てばひやかされ　同

席題　寫眞　源坊選

濱口は自信あり氣の顏を載せ　トシオ
微笑んだとこで一枚寫される　流星
よく撮れた寫眞は別な方へはり　正博
獨り身の壁にかゝつたクラヽボウ　耕兵
前掛を外して嫁も寫るなり　舟々
手がかりとなるべく撮つたにはあず　同
叱られて母の寫眞く立つて行き　莢一
醉ふた顏へ父の寫眞が恐はく見へ　同
（人）化ぬのではたさい思ふ氣を撮らし　正博
（地）焼き捨てた寫眞へしばなられる　流星
（天）寫眞機を持つて來たの話して居　規堂
（軸）カンテラの傍に届いた子の寫眞　源坊

第七回　金澤川柳大會（金澤）

第七回金澤川柳大會は春醋はの四月廿日、新裝の仙石町敎育會館で開かれた、金澤の川柳家は勿論遠く大阪より川柳雜誌社の橋本緣雨氏來り縣下では小松蘆城川柳社の同人諸氏を初め各地川柳社の諸君馳せ參じ近來にない盛會であつた定刻、宮本銀砂子開會の辭を兼て所感を述べ大會の幕は第一席銀波樓氏選「別れ」の發表によつて切り落された。かくて順次席題の發表あり滿堂息づまる作句境に彷徨し締切りに至るや選者の前には句稿堆く積まれた。プログラムの進行につれ會長窪田銀波樓氏は參會者への挨拶をかねて川柳家の現狀より論じて將來に及ぼし、作家の小康に安んずべからざるを説き大いに一同を鞭撻引つゞき安川久流美、酒井雅樂頭、中川めかく子の諸氏交々立ち各自の會場より所感を述べ各選者より披講あり採點の結果左の諸氏に賞を贈つた銀砂子氏の閉會辭により和氣藹々裡に散會したのは薄暮に迫る頃であつた。

△兼題（一等）白葉子（二等）今雨（三等）柳二郎

△席題　合點　一等旭光（銀カップその他）二等紅の花（銀盃その他）三等冬青、四等めかく子、五等他駿郎、六等兎月、七等界介樓、八等句三味、九等耕人庵、十等今雨、以下二十等まで。

席題　別れ　銀波樓選

赤い雲母に別れた日を想ひ　兎月
美しく髪が亂れて別れる日　めかく子
切れ話女言ふとことたんとあり　柳二郎
桃割れに結て別れる朝となり　一俵子
別れても逢たも月は冴てゐた　久流美
泣き別れ姑は部屋を締たきり　雅樂頭
敷島の火花が散つた別れなり　紅の花
別れ際女がつける煙草の火　白葉子
姿見へ姿を見せて左樣なら　松水
流連へ今日も歸さぬ鐘が鳴り　庄之助
淋しく別れば柳に風があり　冬青
別れ際は少し金を握らせる　同
樂轉を訪へば淋しく茶を入る　今雨
夕焼へ子供別れる唄になり　界介樓
別れ行く女へむごい紙の雪　句三味
別れ行く女日和の音が冴え　銀砂子
（人）道連と別れ煙草に吸ひつける　今雨
（地）姐さんと呼ぶ今日切の美しさ　紅の花
（天）言事はあるには有が別れる日　めかく子

席題　米國　久流美選

米國へゆけば儲かることにきめ　柳月坊
米國を隣りのやうにもぼは云ひ　殘月
米國を受け賣りにする新歸朝　小夜夫
旱魃にアメリカへでも行く氣なり　樹二
紐育空へ〳〵と伸びてゆき　白葉子

黒船へ　日本人の良い度胸　一俵子
青い目の人形抱いたり寝かしたり　木偶人
米國の話親父は嘘に聞き　文泉
亞米利加は儲かる處移民法　めかく子
爆彈を落して見たい紐育　句三味
極道が米國へ行く地圖を持ち　加賀頭
金の貸し手もなし米國も行けぬ　緑雨
米國へ嫌はれに行く人もゐる　旭光
戰爭を怖れてジヤズの夜が更ける　雅樂頭
米國へ行ます叔父は承知せず　耕人庵
米國へ來てもお金に有りつけず　思芥樓
米國へ來ても同じい貧民窟　旭洋
生活の不安米國から來る　今雨
日本の櫻を植えて禁酒國　兎月
カルホールニヤの夕陽よめしの味　銀砂子
（五客）植民地また星のある旗がふえ　旭洋
（同）米國へ行くとは俺も不甲斐なし　耕人庵
（同）米國の漫畫の顔だニヤ〳〵し　松子
（同）曉烏敏米國の土をかぎ　兎月
（同）ホリウツド遙々來てエキヌトラ　銀砂子
（人）米國へ行つた氣持のカツを食ひ　文泉
（地）駐米大使の幸福な朝　旭光
（天）命短し米國も行きたし　冬青

席題　狂　雅樂頭　選

狂人も笑へば子供這ふて行く　旭光
ふと狂人になるのではないかもひ　せい花
春淺く狂ふ亭主へ疲れ切り　兎月
美しい戀であつたに狂つてる　句三味
狂暴の性質を女教師持て餘し　思芥樓
一笑に付したくはない狂ひ方　木偶人
狂人の食の細さを母案じ　銀砂子
喰ふ事の外は狂人唄つてる　緑雨
狂人へ別な飯が運ばれる　白葉子
狂人になつた刹那を考へる　同
狂人の言葉ごきつと胸を打ち　一俵子
狂ひ死ただそれだけにして仕舞ひ　同
狂人に遠卷の子等馴染んで來　同
（人）失業の何時とはなしに眼に異常　兎月
（地）火をつけて狂人やがて丘へ來る　旭光
（天）氣狂ひのあの氣がほしい惱みあり　耕人庵

席題　女　給　緑雨　選

二次會を抜けて女給に會ひに來る　他馳郎
捨られたやうに女給は又唄ひ　柳月坊
女給に子があるとは思はれず　旭光
判じ繪を解いて女給に閑な晩　木偶人
よい色になつたでせうと女給の眼　せい花
エプロンの姿を女給とも見えず　夢遊子
兄さんの事心配な女給なり　紅の花
女給ひよつこり髷の友に逢へ　兎月
どれだけのポチが女給に咳かれ　雅樂頭
しんみりと聞けば女給と同じ國　旭洋
ひき眉の女給に明る過ぎる晩　めかく子
むごい兄持つて女給の惱ましき　句三味
（佳）くつたくも無く女給老けてゆき　白葉子
（佳）女給は弟の戀を察してゐる　冬青
（佳）カーテンの蔭で女給の粉白粉　加賀頭
（同）日本間へ女給連つた世辭でくる　紅の花
（同）生活のための女給と思はれず　旭光
（人）餘つぽど事に女給はつんざする　錦水
（地）女給ふと何思ふたか笑ひ　他馳郎
（天）女給何にも知らずついてくる　紅の花

（以下略す）

南海
至誠

川柳會（大阪）

四月廿日　淡輪吟行　竹内多聞報

雜　吟　互　選

傘をたゝんでつゝじの中を行く二人　一杉
失業へ無やめに伸びる松の枝　同
向ふでも何か言ふてる山の上　涼哉
又來たゾ又來たと遊園地　畑井
ある丈ける子寶見せて貝拾ひ　黒天子
通る丈け通りて春の濱に醉ひ　朝陽
法界屋見切りをつけて引返し　格子樓
どうせ足らぬ夫婦ぐらしつゝじへ來　路郎

船　路　郎　選

船遊びる奥さん丈けは日傘さし　樹光
妻を子をのけてのどかな船出なり　格子樓
兩眼鏡日傘の船へ當られる　黒天子
釣舟の上つてくれれば女がゐる　一杉
あの舟の中に女の顔が見え　瓢山
釣舟へ海豚仰山にくつけられ　貴山
舟の客二圓半程ブルに見え　樹光
行逢ふ舟のモダンへ手をとめる　朝陽
磯づたい出船の數をよんで見る　同
（人）飛込みがあつて汽船の綱る丈け　貴山
（地）淡輪の舟も稼いでゐるらしい　畑井
（天）歩く丈け歩いて舟の世話になり　朝陽
（軸）泊り船戀する程の風も吹け　路郎
船は行く〳〵戀人の顔小さし　同

雜　吟　互　選

硝子戸にうつるや君のあですがた　太田
博士でも知らぬやまい落葉頃　樹光
嘘言に利息のことも考へる　瓢山

春明を氣にする母の店を見る　黒天子
硝子槽の中とも知らず魚の群　籬下
筍のやらかいトコは母に上げ　畑井
反感の目にいやらしい服の柄　一杉
ホットして出せばマッチの赤い軸　同
運動會パンを配るが幹事なり　同
尼の焚く松葉悲しき戀を秘め　格子樓
遲歸りタオル濡らして妻は待ち　同
大都會靴を汚して歸るなり　島
兩方の手に持つ丈けの慾があり　同
藤椅子にもたれて母の恙なし　多聞
筍を國の土産に頼まれる　朝陽
橋上を見上げる舟の仲のよさ　同

源坊居偶會（大阪）

四月拾六日夜　朝田新水報

通り抜け　互選

抜け路次こんな所に玉屋あり　新水
通り抜け何も訊かずに從いといで　源坊
通り抜け出ると見おぼえある通り　同
通り抜け皆んな妻揚子をくわえ　同

スピード時代　毒仙選

十二月新年號が賣れ殘り　源坊
公園で今日の野球が映寫される　青楓子
上海へ行つて來ますと隣れの娘　新水

二人　新水選

お二人ですかと車掌が念を押し　源坊
二ア人に摘んで貰ふた土筆　毒仙
二人から離れて折の紐を解く　同
勘違ひ二人の中に笑ふ日も　新水

春の歡び　源坊選

春の歡び父きの芽あえを喰ひ　新水
石盤をかなぐり捨てゝ溫い水　毒仙

和田家の慶事に寄せて

歡びを花にも告げん東山　同
（軸）雲雀（ひばり）よハンカチ敷いて掛け　源坊

鐵漿居小集（出雲）

四月十二日夜　伊藤綠之助報

席題　腹、心配、旅

今日も又旅の空なる子を思ひ　すみ子
腹で來いなどゝ痰呵を切つてゐる　霜村
朧夜の旅愁そゞろに戀となり　同
旅の恥掻き捨てなどゝ騷いで見　久麿緒
心配な母の眼異鄕の空へ浮き　鐵漿
旅の身だ星よ今夜は話さうね　同
これからは樂をしますと旅に出る　綠之助
旅疲れ土地の銘酒の醉心地　同

綠雨居小集會（大阪）

五月五日晝　橋本綠雨報

席題　藤棚　互選

あつちではまだ騷いでる藤の棚　かほる
藤棚を通り過ぎれはペンチ（ですい）居り　鶴峯
マヽゴトの引越し藤の蔭へ來る　雨町
藤棚の蔭へ休めぬ蜂がとび　同
藤棚の蔭へグランドの子を呼び　綠雨
家出したことを考へ藤棚の春　同

席題　年寄　互選

年寄りは今日の天氣をたづねられ　雨町
年寄りの眼に人情はすたれたり　同
年よりにお茶所のお茶ののみかげん　かほる
面白くないか年寄り眠に出し　同
緣日は年寄り同士話し合ひ　鶴峯
老人が世話方をする御緣日　同
近道を行くに年寄り骨が折れ　綠雨
年寄の中に子供はだまつてゐ　同
お茶ばかり呑んで年寄り喋ること　同

近江の春（八幡）

四月十七日　若井たけし報

十五日の京都五社聯合句會に出席したひろし、愚陀の二君と共に近江八幡に歸りいとも「コーフウ的」な二日を過す。新らしき言葉「コウプロ」を發明して盛に連發する。

豆の葉の庭に晝頃を起き　ひろし
南天の實紅々妻の顏　同
夏みかんころ〳〵山晴れて　同
風ひかる友の靴音　たけし
春の夜のレコードを止める　同
かげろふのなかで笑ひ合つた　同

柳影公二對座吟（大阪）

上田柳影報

五月廿六日夜某喫茶店の一隅で快よく作句に耽けつた熱と希望に燃えながら…

鄕愁しきりに柿の色づく　柳影
せめてもの煙に鄕愁託さんか　同
勞働歌唄へど海の變りなく　同
親しんでくれば磯さへないでゐる　公二
人生はさびし海路の果しなく　同
ノーイエス異性の瞳かゞやけり　同

かほる居偶會（大阪）

高橋かほる報

花の山巡査眞面目な顔でゐる　三笑
櫻もう次の日曜の間に合はず　同
男とは別れ櫻に雇はれて　かほる
八重櫻つかれた樣に咲いてゐる　同

その二　四月十七日

煙を叱る座敷からの聲　綠雨
煙とけむり長家のスケッチ　同
風呂をたく煙か今をしさりなり　かほる
好い日和煙は同じ調子で出　同

橋本綠雨先生歡迎句會（石川）

四月二十一日　於聖城美術倶樂部　高田茶撫郎報

綠雨、柳鴉人、吉龍、翠峰、燕子花、亂雨、吉祥、柳糸郎、柳江、伽羅坊、醉羊、茶撫郎、雪杖、素月、溪鶯、山々、

席題　閑人　綠雨選

陰鬱な雨へ閑人困るなり　素月
閑人のくせに早起だけはする　亂雨
閑人の欠伸が長い春日和　柳鴉人
閑人にされた多忙の日が續き　雪杖
閑人は天氣豫防に趣味があり　伽羅坊
閑人は趣味ばかりに生きて居り　同
猫などを飼つてお妾暮してる　燕子花
植木鉢隱居の暇が小半日　同
閑人の今日は茶棚の位置を替へ　茶撫郎
閑人に捕まつたのが最後なり　同
閑人と云はれ世間を五月蠅がり　吉祥
閑人らしく子と遊ぶ日もありて　同
閑人とおだてられ淋しがり　同
（佳）閑人の話へ時計止つてる　亂雨
（佳）閑人に閑人らしい用があり　雪杖
（佳）閑人に賴めば雜作なことを　茶撫郎
（佳）新聞に讀み飽き今日は何處へ行く　柳鴉人
（佳）思給があつて初段に二目なり　同

（人）閑人と言はれるながらも持つ惱　醉羊
（地）二坪の庭に閑人と言ふ暮し　亂雨
（天）常識があつて閑人として置かず　柳江
（軸）叱られたなどと閑人とりあはず　綠雨

席題　迷惑　茶撫郎選

心中客さて〳〵手數のかゝること　柳鴉人
迷惑とは知りつゝ話纏らず　伽羅坊
上役の賴み迷惑とも言へず　醉羊
迷惑な隣のラジオに聞とられ　吉祥
招待の時間へ子供つきまとひ　同
誘はれることも迷惑がつてゐる　綠雨
迷惑を詫びて電話を掛けるなり　同
鐵道へ迷惑かけて亮がつき　柳江
御自慢の茶席へしびれ切らされる　同
迷惑も賴まれて甲斐と締めん　翠峰
お隣の留守番までも背負ひ込み　同
迷惑な女に足を踏まれたり　亂雨
迷惑をかけつゝ近所馴染んで來　同
（佳）迷惑なやうに受付立ちて行く　綠雨
（佳）招待も良いがお酒に困るなり　同
（佳）窓口へ又も手荷物一つ增え　柳江
（秀）迷惑な眼に美はチュウリップ　山々

席題　戯れ　燕子花選

追羽子に戯れて見る松の内　柳鴉人
戯れの犬に晴着は母を呼び　吉祥
戯れの子供に母は笑を添え　素月
戯れに雜妓の戀は眞面目なり　翠峰
戯れの樣に初戀話される　亂雨
戯れをみんな眞顏で詰め寄せる　同
淋しさに戯れて見る近所の子　同

轉居

大阪市東區仁右門町五〇八ノ上

伊藤愚陀

編輯後記其他

雨町生

▼前月號の本欄にも一寸照會されてゐるやうに五月十八日に函館で、第二回海峽親善川柳大會が開催されるので、そこに出席される爲め路郎先生には十五日に大阪を出發された。

そのため本號の編輯後記は、私が代つて書くことになつた。

▼一日の夜、例の顏ぶれて、里十九居に於て月評會が開かれた時節柄「賀本家とたゝかふにより春の日よ」が俎上にのぼつた評者の頭には期せずして鐘紡爭議がむしかへされた。春だII しかし花や踊の春ではない。新綠の春だ。活動準備の春だ。五月節句の鯉が充分の風を含んで緊張してゐる。II 議會では II 婦人公民權案が衆議院を通過した。たとへ貴族院あたりでどう行詰らうと、この事實は新興日本を背負ひ立つ我々にとつて、斷然大きな悅びである。何時の時代に於いても、新しい文化建設を妨たげる所謂保守派といふかたくなゝ人々がゐる。豈樞密院のみならんや、貴族院のみならんや、川柳界も亦然りである。

▼さきにも述べたやうに、路郎先生の旅行の御都合で、特に本號の編輯は急速力で進行させられた。その日に限つて愚陀君を伴なはずに一人來た亂耽。相變らず仕事をしないところは、やはり監督格である。柳影君の始終だまりこくつてるのに引きかへて公二君のこれは又よく喋べること。公二曰く「先生今度來る時、カジカを上げませうか」先生「欲しいけど餌がないよ」公二「生きた蠅とつてやつたらよろしまんが」先生「仲々そんな暇はない。僕は家族の餌を稼せがねばならんよ」公二君「よう言はんわ」こんな無駄口を叩きながらも編輯事務はどし〳〵進捗してゆく、この所は、まさに神技と云はねばならぬ。

▼何時も月評の筆記を煩はしてゐる杏三君から、風邪をひいて編輯日には來られないといふ端書が來た。そこで私がその月評の寫しを貰ひに行く役を申し出た。杏三君を訪れると、二番目の娘さんが風邪で寢てゐる。綠雨さんとこの靜江さんも風邪をひいてゐたし、路郎先生とこの一歩さんにも熱が出たと言つて居られた。えらい風邪がはやるものだ人間の社會生活が氣候に影響する。その氣候は又我々の肉体とデリケートな關係にある。よく〳〵注意すべきである

▼前號で豫報しておいた同人中島鐵洲君等主催、鳥取新報社及び本社の後援によつて、全國川柳展覽會が十、十一の兩日に亘つて催ほされた。天氣もよく、仲々盛況を呈した由、午后から在鳥新聞記者の招待會などが開かれたそうである。本社の主張による川柳の社會化が着々として進捗しつゝあることは喜こばしい。その節に短册その他柳誌等をお送り下さつた各位に對して、本社からも厚くお禮申し上げます。主幹からも特によろしくとのことです。

▼三日の六厘坊忌に出席すべくはる〴〵來阪した、たけし君、その夜は愚陀さんの宅に泊つて翌四日の螢ヶ池句會に愚陀君と共に參席してくれた。前會には逢へなかつた湖舟君の元氣な顏が見られたのも嬉しかつた。

▼路郎先生の机上には亂耽君と愚陀君から例によつて面白い通信が來てゐた。一寸失敬して見よう。前略「僕の就職難も相當有名になつたらしいお話でしたが、それでも一人として、そんなら使つてやらうかと云ふ人のない世の中とは、さりとは不景氣も本格的です。しかし商算の試驗を五度も受けたといふプローゲ付きでは、使つて貰ふなんて、おこがましい考へも出せませず、向ふも手を引きませう呵々。しかし此の頃はすることが決つて、精神狀態もやゝ常道にあります。僕の句が又轉向し始めました。惱みは更に深しです。「句の轉向性を研究してみたいと思つてゐます。只重役的漫

想にすぎませぬが……」そこでその第一の轉向的作品が、「宿の湯のランプ花袋も老ゐにけり」「だそうである君の今後を大いに期待してやつて下さい、皆さんよ。」句會でおあいしましたが長いやうな氣がします、九日は宿替でしたが「天我に組し給はず」見事雨が降りました十一日の日曜も荷物運びにまる潰れです。亂耽にまけずトラックの前へ乘つて活躍しました。活躍しすぎて終に向ふ脛に傷を負ひました。ざつとこんな譯で編輯にも行けなかつたんです。重役が行かないと皆息抜いてゐることでしよう。(エヘン)終りになつて失禮ですが、お子達がわるいそうですが如何ですか。」因みに亂耽君はこの頃自働車運轉の物凄い練習を續けてゐるそうだ。

▼九日に玉造の朝日座で、ふと舊友に會うたのがそも〳〵の發端で、近くのアサヒ喫茶店を振出しに、そこらじうを呑みあるいた。お陰で、その夜の天王寺支部句會に出席する豫定が狂つたわけだ。

▼旅といふやうな暢氣な氣持でもなく、といつて別段所用あつてのことでもないが、四月の中頃から月末まで、私は岡山縣の方へ行つてゐた。そんなわけで宇治川ライン吟行に參加出來なかつたのは殘念だつた。

▼二十八日に歸阪して第一に立ち寄つたのが万よ子。きけば昨日(二十七日)大谷五花村氏が、旅からの歸途來阪して、万よし氏に逢れたとの由、まの惡いこと

僕の家から斜に一軒置いた家から出火して、晩春のこゝろもちを少しく動搖させられた。早速御見舞狀を頂いたので略儀ながら紙上でお禮申し述べます。

麻生　路郎

とには、宇治川吟行の當日つたので、路郎主幹とは逢はれなかつた。それも殘念だし、大阪柳界を一々訪問出來なかつたのも殘り惜しかつたとの通信が不朽洞へ來てゐる。

▼一九三〇年も相變らず社會は矛盾から脱しきることが出來ないであろう。事實を僞はらず、包まず、在るがまゝに摑み出すプロ、イデオロギーは左傾といふ名によつて、小ブル階級からも怖れ惡くまれてゐる。前號に於いて私がたま〳〵例に擧げた事實に對して、「ふあうすと」の壯士連が、かん〳〵になつて怒つてゐるらしい。同誌五月號に於いて、私に突つかゝつて來てゐる雜文の如き、あゝした不まじめなものが、平氣で書かれ且つ讀まれてゐる間はまだ〳〵「川柳＝床屋文學」の公式にしばられてゐなければならぬ。私達はそれが眞面目に書かれたものでない限りは一切相手にしないことにしてゐる。

▼綠雨氏より路郎先生宛次のやうな便りがあつた。「花を探しに行く　今年の春は未だ一回も遊びに出られぬので、校正の出てゐることも知つてゐましたが、突然金澤行を思ひたち、毛氈を敷いたやうな菜の花を眺めながら京都驛に着く。汽車は割合に空いてゐるので樂な旅でした。米原も過ぎ中の郷あたりまでに週刊朝日一册を讀破する。單線なのろ〳〵する北陸線の窓外に點々として、山腹人家の附近に桃や櫻や色々の花が至る處に咲き亂れてる。度々この線も乘りすぎますが、汽車の中で鐘をきくのは始めてゞす。先生の「だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと」の句を思ひ出し、外を見ると、小さな寺で僧侶と尼僧と笑ひ合つて鐘を撞いてゐる。それも春の一景、黑い杉林に白い花が點々と咲いてゐる眺めは、吉野あたりの花とは又別段の趣きがある。山中溫泉にて、綠雨」

▼私達の感覺は人一倍尖端的でなければならない。何故ならばまだ活字の影も見ぬうちから、六月號が出來上つた氣持で、編輯後記を書かればならないから花は散つた。木々は一せいに蒼ざめた。結實の秋だ。浮氣男の心は上かんからビールの泡へと移つた。だがこれは、まさしく五月の感覺である。

▼岡山からの歸途、私はふとしたことから喜美子といふ女を知り合つた。彼女は獨歩の「武藏野」を賞讃してゐた。彼女は最初から仲々の皮肉家だ。川柳にも理解を持つてゐる。つまらぬことだらうが思ひ出したので書いてみたまでゝある。

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記すること。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めること

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第七卷第八號課題

六月五日締切（各題十句以内）

▼秘密　岩本素人選

▼深夜　福田山雨樓選

▼空車　出口雨町　中澤濁水　共選

第七卷第九號課題

七月五日締切（各題十句以内）

▼海　前田雀郎選

▼妹　安井ひろし選

▼凉み　酒井駒人　揚井二南　共選

毎號募集

▼近作柳樽（拾句迄）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號	一部	金參拾錢
新春特輯號	一部	金五拾錢
八月特輯號	一部	金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢		
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢		

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和五年五月廿五日印刷
昭和五年六月一日發行
第七卷第六號（毎月一回一日發行）
編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎
發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替大阪三一五一四番　電話天下茶屋二五七九番
事務所　大阪市住吉區杭全町六〇三番地　川柳雜誌社　振替大阪七五〇五〇番　電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（函館）石塚（京都）三宅（松山）弘文舍

川柳雜誌社關係の人々（いろは順）

賛助員

池澤樂居　岡田三面子
大道弘雄　川上三太郎
岡本一平　川村花菱
片岡直方　吉岡鳥平
嘉納純　吉田清
田中辰二　窪田銀波樓
長崎柳秀　安川久流美
國枝史郎　前田雀郎
藤村作　小出楢重
藤本卯之助　柴谷柴舟
赤井清司　篠原春雨
淺田一　蛭子省二
末弘嚴太郎　森東魚
相元紋太

客員

伊藤彦造　生田翠夢
大島濤明　池田雪峰

社友

本田柳一路　山本雨迷　森石竹　酒井駒人
西村市公　増井汀柳　須崎豆秋　淺井冷々子
友淵貴山　丸山公二　朝田新水
若井たけし　近藤テルホ　伊藤綠之助　北山悟郎
谷村稔　熊本黄蛾　岩本素人　水谷鮎美
辻左馬　柳川洲馬　岩崎柳路　庄萬よし
永田里十九　楊井二南　伊藤愚陀

同人

中川めかく子　越田久水　原史風　石川双葉子
中野柳陽　安西杏三　長谷川一徹　橋本綠雨
中澤濁水　阿形一杉　太田朝陽　安井ひろし
中見光路　阿部閑生　小川三猿堂　松丘町二
上田柳影　櫻井圓角　龜井花童子　松盛琴人
植田湖舟　木山青砂郎　高橋かほる　出口雨町
桑原京郎　水田光穂　竹内多聞　麻生葭乃
松村敏郎　三輪五輪　中島鐵洲　住田亂耽
松田多郎　白井梅里　藤里好古主幹
福田山雨樓　麻生路郎

編輯局（同人）

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事西村　市公
山口支部（山口縣）幹事柳川　洲馬
函館支部（函館市）幹事龜井　花童子
小松支部（石川縣）幹事本田　柳一路
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事水谷　鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事植田　湖舟
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
糸屋町支部（大阪市）幹事近藤　テルホ
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
簸川支部（島根縣）幹事伊藤　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
北濱支部（大阪市）幹事谷村　稔
別府支部（別府市）幹事小川　三猿堂
堺支部（堺市）幹事友淵　貴山
松山支部（松山市）幹事岩本　素人
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
平野支部（大阪市）幹事熊本　黄蛾

古本屋時代

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾册か求めるうちには幾册かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

清酒

午後六時 白鶴が待ち 妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入　定價一圓（送料拾錢）

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び
日月は輝く
大衆と共に

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありたし

麻生路郎著　川柳漫談　價壹圓五拾錢　送料拾八錢

岡田三面子著　寛政改革と柳樽の改版　價貳圓五拾錢　送料拾八錢

同　隨筆　虚心觀　價貳圓參拾錢　送料拾八錢

今井卯木著　誹風柳多留拾遺　價貳圓　送料拾八錢

川上三太郎編　新川柳壹萬句集　價壹圓五拾錢　送料拾錢

同　川柳滑稽句集　價九拾錢　送料八錢

近藤飴ン坊編　新川柳類壹萬句　價壹圓五拾錢　送料拾錢

西原柳雨著　川柳江戸歌舞伎　價參圓五拾錢　送料拾八錢

同　川柳江戸名物　價貳圓五拾錢　送料拾貳錢

同　川柳參尾志　價壹圓五拾錢　送料拾貳錢

同　川柳吉原志　價四圓八拾錢　送料拾八錢

同　川柳風俗志上卷　價參圓八拾錢　送料拾八錢

武笠山椒著　誹風柳樽通釋　三卷各卷參圓　各送料拾八錢

柳書取次　御注文は前金の事

大阪文案社
大阪市西成區千本通五の七
電話天下茶屋二五一九番
振替大阪三〇三九二番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和五年五月廿五日印刷納本　昭和五年六月一日發行